

開発こうほう

Hokkaido Development Association

共に北海道の未来を創る

September.2026

9月号

北海道新時代

北海道の生産空間における特定地域づくり事業協同組合制度の活用について
「日本の豊かな暮らしを支える北海道農業の持続的な発展」

シリーズ「北海道の地域を考える」

第3回 若い女性は、なぜ東京に向かうのか？（ジェンダーギャップ編）

シリーズ 北海道の博物館・郷土資料館

天塩の歩みを、赤レンガに刻んで

地方創生

第3期滝上町まち・ひと・しごと創生総合戦略

ガストロノミックツーリズムin北海道

「上川」

ほっかいどう学

ひとびとの想いが育てる博物館文化



北海道遺産 Hokkaido Heritage

『夢だった場所』（『北海道遺産フォトコンテスト2023』応募作品）

撮影者 宮里 優子 様

北海道遺産 「旧国鉄土幌線コンクリートアーチ橋梁群」

昭和初期に十勝内陸の森林資源の運搬を目的に建設された第1級の鉄道遺産。地元住民を中心とした活動で保存が実現された。中でも季節によって見え隠れする「タウシュベツ川橋梁」、32mの大アーチを持つ「第三音更川橋梁」が有名。地元NPOの保存・利活用へ向けての活発な活動は全国的にも市民活動のモデルとされている。

Contents

北海道新時代①

北海道の生産空間における
特定地域づくり事業協同組合制度の活用について … 1
国土交通省北海道開発局開発監理部開発調査課

北海道新時代②

「日本の豊かな暮らしを支える北海道農業の持続的な発展」
～国営農地再編整備事業 南長沼地区～ … 5
国土交通省北海道開発局札幌開発建設部札幌南農業事務所

開発調査総合研究所 シリーズ「北海道の地域を考える」(3)

北海道の人口問題の危機
ー地域の確かな将来に向けて考えたいことー
第3回 若い女性は、なぜ東京に向かうのか？
(ジェンダーギャップ編) … 9
(一財)北海道開発協会開発調査総合研究所

開発調査総合研究所 シリーズ 北海道の博物館・郷土資料館(6)

天塩の歩みを、赤レンガに刻んで
天塩川歴史資料館 … 13
鷹尾 心

寄稿

北海道の開発と鉄道ー1世紀半の軌跡ー <中>
黄金期ー戦争、そして電化新時代 … 15
原田 伸一

地方創生

第3期滝上町まち・ひと・しごと創生総合戦略 … 19
滝上町まちづくり推進課まちづくり推進係

ガストロノミックツーリズムin北海道

～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～ 第13話
「上川」 … 23
遊佐 順和

北のサクラ彩る歴史と文化 第1回

城下町・松前の八重桜 … 27
小沢 信行

「ほっかいどう学」第58回

ひとびとの想いが育てる博物館文化
ー札幌市博物館活動センターを例にー … 31
田中 嘉寛

もっと知りたいアイヌの心50

イタクラマッー言霊 … 35
佐賀 彩美

インタビュー 飛翔のレシピ 41 ー釧路市ー

地元がどんどん広がっていく
名塚 ちひろ … 36
かとう けいこ

地域おこし協力隊 第60回 ー上砂川町ー

町の余白を魅力に変えるーそれが「職人型町おこし」… 38
吉田 章彦

「活動報告レポート」ー芽室町ー

官民連携で挑む「十勝式移住定住支援モデル」
ー広域連携による移住体験ツアーの実証実験から見えたものー … 40
NPO法人 Qucurcus

わが村は美しくー北海道 未来へつなぐ 第67回 ー比布町ー

『人が元気になる』ソーシャルファームを目指して … 42
ピリカ株式会社

お知らせ

第39回 北海道スカイスポーツフェア in 当麻 … 43
お知らせ … 44



北海道の生産空間における特定地域づくり 事業協同組合制度の活用について

国土交通省北海道開発局開発監理部開発調査課

はじめに

北海道の人口減少は全国に先行して進行しており、食、観光、脱炭素化等北海道の価値を生み出している生産空間の維持が困難になるおそれがあります。

令和2年度から始まった「特定地域づくり事業協同組合制度」は、人口の急減に直面している地域において、就業の機会を提供することにより、地域社会の維持、地域経済の活性化等を図るもので、道内では令和8年1月時点で、9箇所を導入されています（下川町、中頓別町、初山別村、名寄市、石狩市（浜益）、知内町、ニセコ町、新得町、北竜町）。

第9期北海道総合開発計画の施策である「農林水産業の持続性を支える農山漁村の振興」、「多様で豊かな地域社会の形成」等を推進する上で、同制度の活用が有効と考えられます。そこで今回は、同制度を紹介するとともに、導入している市町村への聞き取り結果に基づき、同制度を活用するにあたって留意が必要と考えられる点をお伝えいたします。

1 北海道の人口の推移と労働環境の課題

北海道の人口は、令和2（2020）年から令和32（2050）年の30年間で、約522万人から約382万人、約27%減少すると推計されています。全国の推計減少率は約17%であることから、北海道は全国よりも人口減少が先行すると予測されています。

北海道の65才以上の人口割合は、令和2（2020）年は32.1%であり、全国の令和17（2035）年と同等であることから、北海道は全国より15年程度早く高齢化が進行、今後、更に加速すると予想されています。従って、前述にもありますが、地方部の機能維持が危惧されるところです。

また、北海道の主産業である第1次産業（農林水産業）は、季節により繁閑が生じ、通年の安定した雇用や収入の確保が困難なため、定住・移住の支障となっています。

2 特定地域づくり事業協同組合制度

(1) 目的

本制度は、地域人口の急減に対処するための特定地域づくり事業の推進に関する法律（令和元年12月4日公布・令和2年6月4日施行）に基づき、総務省が創設した制度です。特定地域づくり事業を推進するための措置等を定め、地域づくり人材の確保及びその活躍の推進を図り、地域社会の維持及び地域経済の活性化に資することを目的としています。

(2) 支援内容

本制度では、農林水産業、商工業等の地域産業の担い手を確保するための特定地域づくり事業（季節ごとの労働需要等に応じて複数の事業者の事業に従事するマルチワーカーに係る労働派遣事業等）を行う事業協同組合に対して、以下の項目について財政的、制度的な支援を行うものです。地域全体の仕事を組み合わせることで、新たな雇用の場（安定的な雇用環境、一定の給与水準）を創出し、移住・定住を促進します（図1）。

- ① 特定地域づくり事業協同組合でマルチワーカーを雇用し、組合員に派遣
- ② 地域で活躍する人材の確保・育成とその活躍推進を図るための企画・実施

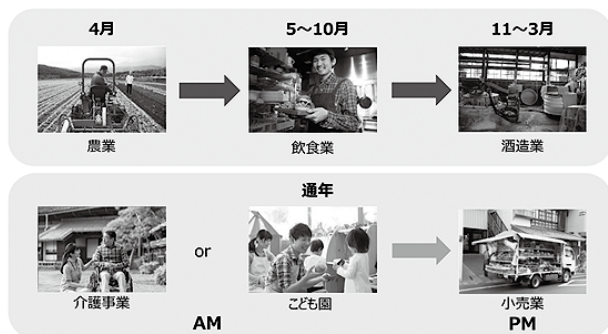


図1 特定地域づくり事業協同組合制度の活用方法のイメージ
出典：特定地域づくり事業協同組合制度の概要について（R7.10 総務省地域力創造グループ地域自立応援課）

3 特定地域づくり事業協同組合の事例調査

本制度を活用している北海道内の2団体に対して、制度導入の契機、事業概要、制度活用にあたっての工夫・課題等について、聞き取り調査を令和7年6月に行いました（表1）。一つ目は、地区外からの労働者を確保したい「浜益特定地域づくり事業協同組合」、二つ目は、地区内の労働者の受け皿を確保したい「なよろ地域づくり事業協同組合」です。

表1 聞き取り調査先一覧

調査実施日	令和7年6月4日	令和7年6月23日
団体	浜益特定地域づくり事業協同組合	なよろ地域づくり事業協同組合
所在	石狩市浜益区	名寄市
認定年月日	令和4年3月14日	令和4年4月25日
導入の背景	若年層の人口流出が激しく、農林水産業、観光、運輸サービス業の存続に危機感を持つ地域で、地区外からの労働者の受け入れが喫緊に課題であった。	市内の工場が停止となったため、労働者が市外に流出しないように、雇用の受け皿を確保する必要があった。
事務局	1人：個人事業主（漁業）をしながら、事務局を兼務	1人：元JA名寄の職員
主な派遣先（組合員）	農業、漁業、水産養殖業、宿泊業、飲食店、その他の運輸に付帯するサービス業	酪農、道路旅客運送業、農業協同組合
聞き取り相手	事務局長	名寄市経済部産業振興室産業振興課

(1) 浜益特定地域づくり事業協同組合

1) 組合立上げの経緯、準備等

地元で漁業を営むA氏（現在の事務局長）が、高齢化や若者の地区外流出等、地域の担い手不足について石狩市に相談したことが、組合の立上げのはじまりです。A氏の担い手不足を解決したいとの情熱に地域が賛同し、出資含め本組合を作ることについて、組合員となる仲間と意見が一致しました。A氏の本気度を感じ、石狩市も設立のための書類作成や手続きをサポートしました。

出資金については、事業開始後にトラブルとならないように、A氏が本事業制度の趣旨や事業内容を組合員に丁寧に説明し理解を得ていました。マルチワーカーの時給は、組合員の職種ごとに違いを設けると事務局の事務負担が増すため、職種にかかわらず同一にし、また、派遣先によって不公平感が出ないように、一番高い職種に合わせています。組合の立上げには北海道中小企業団体中央会の支援も得ていました。

2) 組合員の構成

組合員 8 事業者（派遣先）の業種は、漁業（ホタテ）、漁業（秋鮭）、農業（米・肉牛）、農業（米・花卉）、飲食業、観光協会です。

3) マルチワーカーの構成

マルチワーカーは、これまで通算 7 名を雇用していましたが、地域に馴染めず 3 人が退職し、調査時点では 4 名（栃木県、浦河町、岩見沢市、石狩市の出身）でした。

4) 事務局の仕事

事務局は組合員の季節ごとの業務内容、繁忙期・閑散期を把握し、マルチワーカーの能力、希望等を考えながら派遣先を調整しています。また、マルチワーカーは副業も可能ですが、本組合と副業での仕事量を合わせて、同一業種の仕事量が全体の 8 割を超えられないことから、副業の業種、仕事量にも配慮しながら、派遣先の調整をしていました。

その他、組合員やマルチワーカーの要望等の把握や情報共有を行うため、組合員とマルチワーカーとのコミュニケーションの場を設けています。

5) マルチワーカーの確保

地域外の方に浜益を選んでもらうため、はじめは事務局が直営で HP を開設し、地域の良さを PR しました。求人は、移住サイト、ハローワーク、地元企業求人サイト、移住促進フェア、自衛隊の退官者向け説明会等を通じて行っています。

ミスマッチを防ぐため、地域を知ってもらうため、また人柄等を確認するため、応募者には採用前に地元へ来てもらっています（事前訪問にかかる費用は事務局の負担）。マルチワーカーには、将来的に移住・定住し、起業や地域の企業への就職を見据えてもらうため、資格取得等の支援も行っています。

冬期は組合員の業務量も少なくなることから、今後は、通年の安定的な雇用を確保するため、冬期間の除雪作業（建設業）や役場（支所）への派遣も検討しています（令和 6 年度から、マルチワーカーの建設業従

事も可能となりました）。

6) 地域活性化の芽

マルチワーカーが地元の祭りに参加する等地域活性化の芽が出てきています。今後の定住を考えると、昔から住んでいる地元住民との寄り合いにも、マルチワーカーに参加していただければと事務局では感じています。

(2) なよろ地域づくり事業協同組合

1) 組合立上げの経緯、準備等

名寄市にあった工場の操業停止に伴い、元従業員の雇用の場を確保したい名寄市と、労働力を確保したい地元農協（JA 道北なよろ）が主導し、本組合を設立しました。

事務局運営は地元農協がサポートしながら元農協職員が担い、実務的な内容は名寄市が担当しています。前例がなかったため、名寄市が上川総合振興局を通じて総務省に問い合わせしながら、本組合の仕組み作りを行いました。

2) 組合員の構成

組合員 5 事業者（派遣先）の業種は、農協、農業生産法人、運送会社（タクシー）です。名寄市内の事業者には本組合への参加の意向を確認しつつ、市内の民間派遣会社と業種が重複しないよう、公共性の高い業種を選定していました。主に夏は農業、冬はタクシー運転手として通年での雇用を確保しています。

3) マルチワーカーの構成

マルチワーカーは 2 名採用していますが、2 名では組合員の要望に応えられないため、少なくとも 6 名は確保したいと考えています。

4) 事務局の仕事

浜益特定地域づくり事業協同組合と同様に、組合員とマルチワーカーの希望等を聞き取りながら、派遣先のすり合わせを行っています。

5) マルチワーカーの確保

地域内で労働者を確保するため、求人はハローワークが主体ですが、申し込みを増やすため、組合員負担

で広告会社に求人募集を依頼しています。地元で陸上自衛隊の駐屯地があるため、退官者向けの説明会にも参加しています。2名のマルチワーカーは、もともと名寄市内に住んでいたため、移住・定住の支援は行っていません。

4 組合制度の活用のために

ヒアリング結果から、本制度の活用にあたって留意が必要と考えられる点を以下に述べます。

- ① 本制度の立上げには、雇用、人材を確保したいという強い意思を持った発起人、団体が事務局となり、その事務局運営を市町村他関係機関が協力する体制を構築すること
- ② 本制度を運用するには、事務局として様々な仕事・役割（市町村、マルチワーカー、組合員との調整・相談役等）に対応できる人材を確保すること
- ③ 通年の安定的な雇用のためには、特に冬期間に仕事のある組合員を確保すること
- ④ マルチワーカーに地域を選んでもらうには、移住サイトへの掲載等募集方法の工夫や、移住・定住したいと思ってもらえるような魅力ある街づくりとそのPRを行うこと
- ⑤ 定住・移住の促進のためには、マルチワーカーが地域のイベントや地元の集まりに、地域住民との垣根なく参加できるよう働きかけを行うこと

おわりに

今回、特定地域づくり事業協同組合制度を導入している道内9箇所のうち、雇用確保の経緯等が異なる2箇所についてヒアリング調査を行いました。

本制度は、移住・定住を促進し、地域社会及び地域経済の担い手を確保することを目的としているため、「地元のPR」、「マルチワーカーの地域への誘致」、「仕事（組合員）の確保」、「マルチワーカーと組合員のマッチング」、「地域への愛着醸成」等の取り組みを経ることになります。それらを事務局が担い、行政機関が協

力するという点において、通常の人材派遣業やアルバイトアプリとは仕組みが異なっています。

本制度は令和2年度に始まった制度であり、導入した地域ではまだ試行錯誤の段階が続いていると思われます。今後、導入事例が増え、取り組みの横展開が図られれば、本制度の活用は広がり、道内の多くの地域で担い手の確保とその活躍による、地域社会の維持及び地域経済の活性化が期待されます。

本稿が各地域での本制度の検討・導入の一助としてお役に立てば幸いです。



「日本の豊かな暮らしを支える北海道農業の持続的な発展」 国営農地再編整備事業 南長沼地区」

国土交通省北海道開発局
札幌開発建設部札幌南農業事務所

はじめに

令和6年3月に閣議決定された、第9期北海道総合開発計画では北海道のポテンシャルを活かし、「我が国の豊かな暮らしを支える～食料安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道」が主要施策の一つに位置付けられています。その実現に向け、「我が国を先導する農林水産業の強化」を施策の基本的方向として掲げるとともに、「地域特性に応じた高効率・高品質生産を可能とする農業生産基盤及びデジタル基盤の整備」や「担い手への農地集積・集約化の加速化と優良農地の確保」に重点的に取り組むこととしています。

また、新たな食料・農業・農村基本法の下、初動5年間（令和7～11年度）は「農業構造転換集中対策期間」と位置付けられ、農地の集積やスマート農業導入による生産性向上を図るため、農地の大区画化などが推進されています。

本稿では、令和7年度に完了した国営農地再編整備事業「南長沼地区」を取り上げ、農地の大区画化を契機とした地域の生産性向上や農業経営の効率化に向けた取組について紹介します。

1 南長沼地区の事業概要

長沼町では、水稻を中心に、小麦や豆類などの土地利用型作物に加え、収益性の高い野菜も栽培する複合経営が行われています。しかし、南長沼地区では、農地が小さく、また排水条件が悪いことに加え、農地が分散していたため、農作業の効率化や機械の共同利用に支障が生じていました。



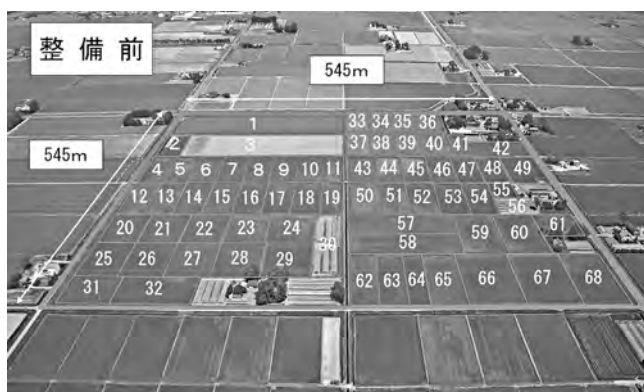
南長沼地区の全景

このため、本事業では場の大区画化や暗渠排水の整備を行うとともに、担い手への農地集積を進めました。

- ・事業工期：平成23年度～令和7年度
- ・受益面積：1,550ha
- ・受益戸数：160戸
- ・主要工事：区画整理1,545ha、開畑 5ha
幹線用水路3条 L=7.7km

2 事業実施の状況

本地区のは場は、6割が50a以下の小区画は場でしたが、本事業により全体の9割以上のは場で1.0ha以上の大区画化が図られています。



1農区 整備前：68耕区



整備後：20耕区

3 事業実施の効果 ～生産性の向上～

(1) 作業時間の短縮

事業実施前は、は場が小区画で形状も不整形であったため、農作業の効率が低い状況にありましたが、大区画化により、農業機械の旋回回数が減少するなど機械の走行性が向上しました。また、排水改良も行った

ことで大型機械の利用が容易となり、作業効率の向上と作業時間の短縮が図られました。



図1 作業時間の短縮（札幌開発建設部調べ）

(2) 農作物の収量増加

暗渠排水などの整備により、農地の排水性が改善され、湿害の軽減や、作物の生育状況にあわせた適期の作業が可能となりました。その結果、農作物の収量増加の効果が現れています。

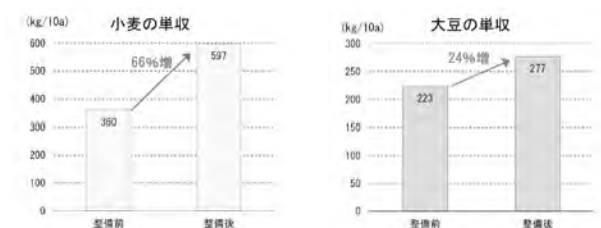
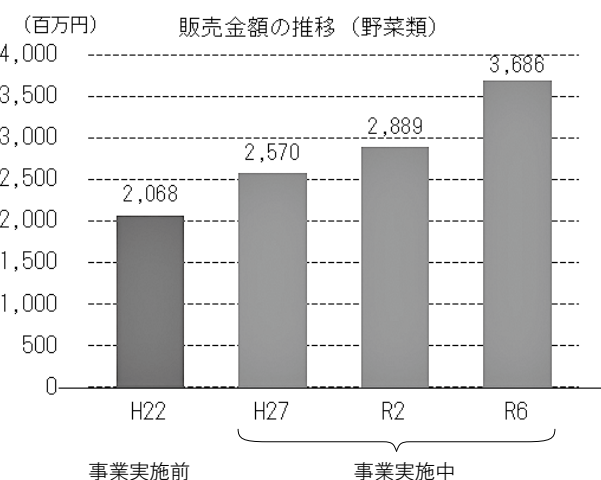
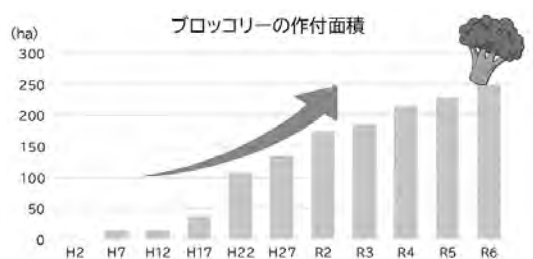


図2 農作物の収量（札幌開発建設部調べ）

(3) 販売額等の増加

本地区を含むJAながぬまの農作物販売額の推移をみると、トマト、ブロッコリー、たまねぎなど野菜類の販売額が伸びています。特にブロッコリーは作付面積の増加が顕著で、台湾などへの輸出も行われています。





台湾のスーパーで陳列されている様子 資料：JAながぬま

4 事業実施を契機とした新たな取組

(1) ICT農業の取組

本地区では事業を契機として、ホクレンにより、RTKシステム（高精度の位置情報システム）の整備（基地局やサーバー等）が行われました。スマート農業・ICTの導入に向けた基盤が整備された結果、トラクターの自動操舵システムやドローンによる農薬散布等の取組が進んでいます。



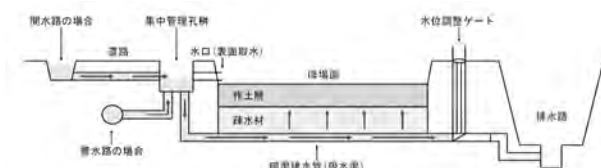
GNSSガイダンスによる耕起



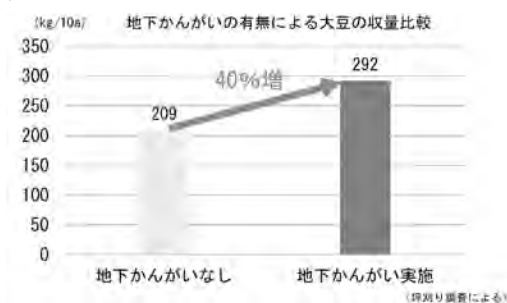
ドローンによる農薬散布

(2) 地下かんがいの取組

本地区では、用水路とほ場内の暗渠排水管上流部を集中管理孔柵で接続するとともに、暗渠排水管の下流部に水位調整ゲートを設置しました。これにより、作物が必要とする水分を根の近くで安定的に供給できるようになりました。



事業実施中の令和3年7月は降雨量が非常に少なく（7月降雨量4.5mm）、作物の生育上、厳しい状況にありました。地下かんがいを実施したほ場の収量は、実施しないほ場に比べ、大豆（ユキホマレ）の収量が4割増加したことが確認されており、地下かんがいの実施は、作物の生育環境の改善や安定生産に寄与しています。



地下かんがいなし

草丈40cm程度、着莢数20個



地下かんがい実施

草丈53cm程度、着莢数32個

南長沼地区資料より

当事務所では、受益農家から寄せられる疑問や、地下かんがい設備の操作・管理の留意事項について、長沼町土地改良総合センター、空知農業改良普及センター空知南西部支所と連携して「南長沼地区 地下かんがいの手引き（令和6年2月）」を取りまとめ、全受益農家に配布し、地下かんがいの一層の普及・定着に取り組んでいます。

(3) 地域の農産物の価値向上に向けた取組

本地区を含む長沼町では、野菜類のブランド化や販路拡大、農産加工品の開発に積極的に取り組んでいます。こうした取組の一環として、生産者とJAながぬまが連携して「N-STARプロジェクト」を立ち上げたほか、生産者組織「MOREベジット」が設立されるなど、地域農産物の価値向上に向けた活動が展開されています。

1) 【N-STARプロジェクト】

N-STARプロジェクトは、「野菜の未来を変える」をテーマに、長沼産農産物の新たな魅力を発信する取組です。

令和6年には、長沼産の白菜を使用した浅漬け商品「沼の浅漬」を産学連携により開発・販売しました。また、令和7年には長沼町産トマトを活用したクラフトジン「vegin tomato」を開発し、ふるさと納税返礼品としても活用されるなど、地域農産物の認知度向上に貢献しています。



沼の浅漬



Vegin tomato

2) 【MOREベジット】

MOREベジットは、JAながぬまの生鮮販売組織の再編・統合により、旧園芸組合連合会を母体として設立された生産者組織です。

産地ブランドのさらなる認知拡大を目指し、有名スープカレー店とコラボレーションし、長沼産ブロッコリーを店舗へ提供するとともに、店内でPRポスターを掲示するなど、地域農産物の魅力発信に取り組んでいます。



資料：JAながぬま

おわりに

昨今の農業を取り巻く環境は、担い手不足、気候変動、燃料や肥料価格の高騰など、大変厳しい状況にあります。一方で、食料・農業・農村基本計画（令和7年4月11日閣議決定）において、食料安全保障の確保に向け北海道農業への大きな期待が示されており、さらなる生産性の向上を図るため、農地の大区画化などを集中的かつ計画的に推進していく必要があります。

また、農林水産省は令和7年度からの新たな取組として、農業者自らが行う畦畔^{けいはん}の撤去などの簡易な基盤整備による農地の大区画化などを支援する「大区画化等加速化支援事業」を創設しました。

北海道開発局としては、地域農業の発展と地域の活性化につなげていけるよう、国営農地再編整備事業などの着実な推進に加え、関係者の皆様とともに新たな事業の普及促進にも取り組みながら、道内農業の持続的な発展に向けて取り組んでまいります。

※ 大区画化等加速化支援事業にご関心のある方はこちらをご覧ください。



大区画化等加速化支援事業概要



北海道大区画化等推進協議会ウェブサイト

北海道の人口問題の危機 ー地域の確かな将来に向けて考えたいことー

第3回

若い女性は、なぜ東京に向かうのか？（ジェンダーギャップ編）

（一財）北海道開発協会 開発調査総合研究所長 目黒 聖直

秋田県出身。高校生の時祖母から「高校出たら大学行かずに就職しなさい」「大学に行くなんてスネかじりだ」と散々言われた。私はバリバリ働くことに憧れていて、たくさん稼ぎたかった。「看護婦ならいい」と看護学専攻限定でやっと大学進学を許してもらった。もともとやりたいことではなかったため仕事が合わずうつ病になった。今は心身に無理がないように東京で事務職をしている。自由に進路を選択できる世界線に生きていたら今自分はどうなっていたのだろうかと思わずにはいられない。（20代 女性）

どんなに仕事で大きな結果を残しても、親や地元の高齢者からは子供を二人以上産まなければ一人の人間として認められない。親から「シングルマザーでいいから子供を作れ」と言われたときは、私のことを子供を産む機械としか思っていないんだと思った。むしろ無計画に子供を作って、警察のお世話になるような行動をしている人の方が一人前のように扱われている。そのような価値観が充満している土地に嫌悪感を持っている。今のままの価値観が続くのであれば、絶対に地元に戻ることはない。（30代 女性）

福島県出身だけど、東京に出てくるのに18年もかかった。男尊女卑や田舎の人間関係に苦労して沢山涙流した。血と涙で手にした東京への切符。あれから15年。東京に住んでやっと呼吸できている感じがする。もう地元には帰らない。女を地元に関じ込めて奴隷扱いする地域なんてもう行かない。もう涙は流さない。（30代 女性）

いずれも、現在のものに切り替わる前のNHKのホームページ「NHKみんなでプラス／クローズアップ現代取材ノート／地方を去る女性たち…なぜ？本音を聞いてみた」に掲載されていた2025年3月18～19日の投稿である。

若い女性が東京に向かう理由

前回は、北海道の女性、特に若い女性の東京圏への転出が顕著であることを見た上で、内閣府政策統括官「地域課題分析レポート～ポストコロナ禍の若者の地域選択と人口移動～」(以下、「内閣府レポート」と呼ぶ)などにより、全国的にも若い女性が地元を忌避して東京圏に転出する状況があることを確認した。では、何故忌避するのか。考えられるのが、ジェンダーギャップである。

地方に仕事があったとしてもそこでの大きなジェンダーギャップゆえ、若い女性が自分の力を発揮できないと考えて、東京圏に行くということか？いや、冒頭に挙げたホームページの元となったNHKのクローズアップ現代「地方を去る女性たち」の放送(2024年6月17日)では、仕事上もさることながら、地方全体を覆う男尊女卑的な雰囲気窒息しそうになって、東京に出たという声が多く聞かれたのである。「女の子は早く結婚して子どもを産めばいいのだ」とか「お兄ちゃんは大学に行っても、女の子は行く必要はない」といった言葉をさんざん聞かされた結果だというのだ。

つまりは、仕事だけでなく、日常生活全般での男女格差、ジェンダーギャップというものが影響している可能性があるということである。内閣府レポートで、地元就職を希望しない女性がその理由として「実家を離れ

たい」「地元の風土が好きではない」を挙げていたのは、このジェンダーギャップのことだった、ということではないのか。

もちろん、女性には責任ある仕事をさせないといった仕事上でのジェンダーギャップもありうる。だが、生活環境としてジェンダーギャップがあるところに、仕事上のそれはないということは考えにくい。原点に返るという意味では、まずは生活上のジェンダーギャップを考えることから始めるべきだろう。

ところで、世の中には、本音では、「男は仕事・女は家庭」こそが日本の美風だと思っている人もいるに違いない。実はこうした男女観が広まったのは明治期以後に過ぎないらしいのだが、それでも、どんな考え方を持ったところで、基本的にはその人の自由である。ただ、特定の考え方を人に押し付けたときに、どうなるかというのは別問題である。

野村浩子『地方で拓く女性のキャリア』（光文社新書2025年）は、全国的に見れば、「ジェンダーギャップの大きい地域から、小さい地域へと、若い女性が移動している」とする（26頁）。もしもある地域において保守的な男尊女卑の傾向が強ければ、若い女性はそこから逃げ出してしまうのだ。そして、その分だけ、地域の人口は減少し、衰退が加速する。

本州・四国・九州のいわゆる内地では、親族の集まる冠婚葬祭において、男たちは酒を飲んで騒ぐだけだが、女性は料理や果てはお酌までさせられるという話がよくある。筆者自身、十年前に福岡県に勤務したときに、又聞きだが、似たような話に接した。ちょっと一息というときも女性陣は台所の隅などに集まって、立ったまま食べ物を摘まむだけなどとなる。町の祭りなどでも同様だ。そんな地域社会にある家庭で母親がひたすら舅や夫の世話をする様子を見て育った女性が、こんなところにはいたくないと進学時の20歳前後で上京する、という流れになる。

数年前のNHKのテレビドラマで、30代と思しき登場人物の女性が、「地方で育った子ども時代、家庭では

父と弟にはおかずが一品多かったし、食事後に二人はテレビを見たり新聞を読んだりして寛いでいるのに、姉である自分は洗い物をする母親の手伝いだった」と語る場面があった。筆者は、この現代にそんなことがあるものかと思ったものだが、その後の「地方を去る女性たち」などの話を聞いて、あながちありえないことではないという気がしている。「この現代に」と言っても、「地方を去る女性たち」に登場するある女性は、東京を令和だとしたら山形は江戸時代だ、と発言する。

北海道におけるジェンダーギャップの一般論

以上は、全国での話である。

では北海道はどうかというと、「都道府県別ジェンダーギャップ指数」（地域からジェンダー平等研究会）というランキングでは、北海道は、三分野（行政、経済、教育）で、2022年の集計開始以来、ほぼ毎回最下位となっている（女性知事の実績が実績にカウントされて、政治分野だけは毎年10位前後）。

しかし、これをどう解釈するのかというのが難しい。この結果に終わっているのは、役場なり企業なりで女性の幹部が少ないとか、女子の大学進学率が男子に比べて低いとかいった統計結果に基づく。だが、個人的には、この調査結果と日常の感覚の間にはどうしても乖離があると感じざるをえない。事実、野村前掲書の巻末に収録された都道府県別ジェンダーギャップに関する16のランキングを見ると、北海道が最下位の項目は一つ（女性議員ゼロの市区町村議会の割合）のみで、共働き夫婦の家事分担など三項目ではむしろベストテンに入っている。

そこで、これまで道内のジェンダー問題に関係する審議会の委員なども多く務められている小内純子札幌学院大学名誉教授に尋ねると、北海道では、少なくとも開拓期は、女性の役割が大きく、本州に比べると地位も高かったと評価されているという。すなわち、「ほとんどの入植者は、他府県での家産を畳んで北海道に移動してきたため、男女は共に等しく一からの出発と

なった。拓殖における男性の労働力はもちろん高く評価されたが、家事・育児、時には介護を担いながらの女性の寄与も高い評価を受けるに値するものとなる」そうだと。

こうした歴史を持つからこそ、北海道では女性も自己主張するし、離婚率や女性の喫煙率は全国でも常にトップクラスになるという社会が形成されたのではないのだろうか。ちなみに、筆者の妻は神奈川県出身だが、初めて北海道に住んだ頃、くわえ煙草をしながらクルマを運転する女性を見て、初めて路上にシカを見たときと同じくらい驚愕していた。

それが、現在では、あくまでも一つの調査結果だけだが、ジェンダーギャップ指数全国最下位という不名誉な地位に墮してしまったのは何故か。小内先生は、一つには、特に農村地帯において、戦後に農協が設立された当初、一戸一組合員制をとって、＜組合員＝経営者＝土地所有者＝男性＞が絶対の体制ができあがったことが大きく関係している、とされる。

もちろん、ジェンダーギャップは農業だけの問題ではないが、北海道は農協王国なので、その社会に与える影響は無視することができないというのだ。2025年7月の時点で、女性理事ゼロのJAは道外都府県では全体の1%しかないが、北海道はなんと68%だ（JA全国女性組織協議会ホームページ）。

ただ、以前、道内のある農水省機関幹部の女性は、「地方農政局（同省の地方機関）で男女共同参画に関わったこともあるが、正直、意識面で本州とそんなに差があるわけではない」と述べておられた。

ましてや、日常的に、農業以外の分野で男性上位の状況は頻繁には感じにくい。事実、3年ほど前に、北海学園大学法学部のあるゼミの学生二十数名（三、四年生で、約半数は女子学生）と意見交換を行った際、筆者が示したデータを見た学生からは、若い女性が転出する原因をジェンダーギャップ（就職前の学生なので、生活上のものということになる）だと考える意見は出されなかった。戦前までの女性の地位の高さを考えると、

内地の冠婚葬祭などでの話は、北海道ではそれほど見られる光景ではないと考えてよいように思われる（もちろん、地域差はあるかもしれない）。

仕事上のジェンダーギャップ

つまりは、北海道では生活面でのジェンダーギャップはそこまで深刻ではないのではないか、ということなのだが、仮にそうだとすると、仕事上はそのギャップが存在する、ということでは困る。表（次頁）は、若年者の転出数について、北海道と、過疎の話題が取り上げられがちな東北・九州の四県の合計とを比べたものである（総人口がほぼ同数になるように四県を選んだので、この四県を単純に合算することの妥当性は問われうる）。

これを見ると、北海道は、他県と比べて25～34歳の女性の転出が目立つ。すなわち、より若い層では四県の方が転出数が多いにもかかわらず、25～34歳では北海道の方が多く（宮崎と鹿児島両県については、より若い時に東京圏でなく福岡県に転出する例も多く、数年後に帰郷しやすいだろうということは考えられる）。北海道の場合、地域社会や家庭では不平等の現実を感じないままに社会人になったが、職場にはジェンダーギャップが存在していて、会社に勤めてから不平等を感じたため故郷を離れたという説明は十分にありうるのだ。

そして、確かに、2025年3月8日付の北海道新聞では、地元だと女性は昇進に不利と感じて千歳市から東京に転職した事例が紹介されている。記事では、東京圏には外資系企業や外国での活動を通じてジェンダーの平等が浸透している大企業が多く、社会全体でもジェンダーに対する意識が定着しているとする。

だが、野村前掲書の巻末に収録されたランキング集を見ると、たとえば、フルタイムの仕事での男女の賃金格差では、北海道の70.5（男性＝100）は、埼玉県以外の一都二県の数値を僅差で上回る。少なくともこの点では、北海道が東京圏より劣悪ということはない。数多い大企業の水準に引き上げられ、男女を問わず東京

圏の平均収入が高額なのは事実だが、それでは女性だけが特に転出する理由にはなりにくい。もっとも、内閣府レポートには、「相対賃金（筆者注：その県の対全国平均賃金比率）が転入超過率に与える影響は、女性の方が強い」とあって、要するに、女性の方が賃金の高さを理由に移動する傾向が強いらしい。とはいえ、洋服などの出費が多い女性の方が賃金の上昇により強く魅力を感じるからという見方も可能だし、この傾向をジェンダーギャップの問題と結びつけるのは難しい気がする。

一方、現実問題として、東京圏へは、札幌以外の道内主要都市から転出していく人たちも多いようだ。全国的知名度のある企業も数多くあるそれら道内主要都市の職場環境において、目を覆うような男女格差が至る所にあるということは考えにくい。

だが、道内の小規模町村にあっては、それでもジェンダーギャップの状況を真剣に検証する必要がある。少しでもそれがあれば、仮に東京圏に転出させる作用を持つほどの大きな力にはならないとしても、札幌への転出を促す原因となる可能性ならば十分にあるからだ。

かつて、ある町の役場で、「職員同士で結婚したら女性性が辞めなくてはいけない」というルールが表面化して問題になったことがあったが、筆者も、別の町で働くある女性から、職場に「同じ勤続年数でも男性は管理職になれて女性はなれない。夫婦で勤めると男性は正職員になったのに女性はしばらく非正規雇用のまま」などの噂話があると教えてもらったことがある。二年ほど前の話である。こうした噂話が、真実のことであってはならない。

もっとも、彼女自身、学生時代には、インターンの際に「どうせ結婚したら辞めちゃうんでしょ」と言われたりして、怒りはしないがモヤモヤした経験が何回かあったとも語っている。濃淡の差はあっても、札幌も含めてどこでもジェンダーギャップが生まれる素地はあることを忘れてはいけない。

それにしても、仮にジェンダーギャップが北海道の若い女性が東京圏に転出してしまう最大の理由でないとするれば、他のなにが理由なのか。もう少し深掘りしてみる必要がありそうだ。

表 北海道と道外四県の若年者の転出数（2023年）

（男性）	転出総数	15～19歳	20～24歳	25～29歳	30～34歳	15～34歳	15～34歳以外	総人口	転出/人口
北海道	-1,594	-133	-2,062	-521	-51	-2,767	1,173	2,380	-0.07%
各県計	-5,406	-3,675	-3,353	-713	-55	-7,796	2,390	2,199	-0.25%
青森県	-2,538	-738	-1,188	-318	-177	-2,421	-117	556	-0.46%
秋田県	-1,278	-598	-702	-223	-4	-1,527	249	430	-0.30%
宮崎県	-665	-901	-703	-91	77	-1,618	953	488	-0.14%
鹿児島県	-925	-1,438	-760	-81	49	-2,230	1,305	725	-0.13%

（女性）	転出総数	15～19歳	20～24歳	25～29歳	30～34歳	15～34歳	15～34歳以外	総人口	転出/人口
北海道	-3,933	-525	-2,149	-705	-138	-3,517	-416	2,661	-0.15%
各県計	-8,278	-3,268	-4,212	-505	-113	-8,098	-180	2,452	-0.34%
青森県	-3,028	-800	-1,428	-210	-64	-2,502	-526	622	-0.49%
秋田県	-1,897	-610	-850	-194	-13	-1,667	-230	479	-0.40%
宮崎県	-1,064	-703	-889	13	51	-1,528	464	544	-0.20%
鹿児島県	-2,289	-1,155	-1,045	-114	-87	-2,401	112	807	-0.28%

単位：人、総人口のみ千人 注1）日本人のみの数字 注2）マイナスは転出超過を示す

注3）当然だが、男女の総人口を足すと、その道県の総人口になる（北海道は、2,380+2,661で約504万人）

出典：総務省・住民基本台帳人口移動報告 表3-3「年齢（5歳階級）、男女別転入超過数一全国、都道府県、3大都市圏（東京圏、名古屋圏、大阪圏）、21大都市（移動者、日本人移動者、外国人移動者）（2023年）」

【総人口のみ】人口推計（2023年（令和5年）10月1日現在）表2 全国：年齢（各歳）、男女別人口・都道府県：年齢（5歳階級）、男女別人口

天塩の歩みを、赤レンガに刻んで 天塩川歴史資料館

天塩川歴史資料館 学芸員 鷹尾 心



HPはこちら



天塩川歴史資料館について

天塩川歴史資料館の建物は、元は天塩町役場として建てられたものを利用しています。役場庁舎として建築された1951（昭和26）年から新庁舎が落成した1979（昭和54）年まで、町のシンボル「赤レンガ庁舎」として町民に親しまれていました。レンガを積み上げる作業には当時の役場職員も駆り出され、わずか11カ月で完成させたと言われています。当時の天塩町の経済的な状況を鑑みると非常に無理をした建築工程だったと思われますが、そのおかげで現在でも町のランドマークとして愛される建物の姿が残されています。

展示の概要

改装を経て1989（平成元）年に資料館として生まれ変わった際には、町民のみなさまからの2,000点を超える寄贈資料を基に展示が構成されました。それぞれの資料は「川と海のくらし」「テセウから天塩へ」「旧町長室」「街のくらし」「くらしを守る」「原野のくらし」「知を啓き、次代を拓く」「天塩川のめぐみ」「北方圏

への夢」の9つのコーナーに分かれています。生活用具や農具を中心に、明治～昭和初期の天塩での暮らしや世界最古のコククジラ化石「テシオコククジラ」のレプリカ、姉妹都市であるアラスカ州ホーマー市から贈られた物品などの展示をご覧ください。

展示の見どころ

当館の見どころとして、2つの展示を紹介します。まずは資料館に入って真っ先に目に入る迫力満点の大きな帆船、「長門船」と呼ばれる川船の模型です。天塩町で実際に造船所を営んでいた橋詰造船所の船大工によって、本物の2分の1の大きさに制作されました。長門船は、「天塩材」という呼び名が付くほど重宝された天塩川流域の木材を運搬していた川船の総称で、天塩町の木材産業や経済発展の歴史を語る上で欠かせない象徴的な展示です。

そして、もう1つはテシオコククジラの化石レプリカです。この化石は1995（平成7）年、天塩町市街地から南東に位置する男能富^{だんのつぶ}の国有林で発見され、翌



資料館の入り口でお客様を出迎える長門船

1996（平成8）年に発掘作業が行われました。発掘されているコククジラ科の化石の中では世界で最も古い、およそ300万年前の年代の化石です。

天塩川歴史資料館の取り組み

当館には2025（令和7）年に初めて専任の学芸員が配置されました。1989（平成元）年の開館から40年弱経ち、数十年間未整理の資料や放置された設備機材、近年の気温上昇に対応できない展示環境、情報発信体制など、対応が必要な箇所は枚挙に暇がありません。これから先、天塩町の歴史を紡ぐ大切な資料を未来に繋^{つな}げていくために、町の資料館としての可能性を模索していく必要があると考えています。

昨年からの新たな取り組みとして、資料館のデジタルコンテンツの充実を図っています。都市部から離れた天塩町へ足を運ばなくても、この町に興味を持ち、来訪のきっかけになるコンテンツを町外・道外の人々がインターネット上で楽しめる状態にできれば、と考えているためです。そのため、資料館公式ウェブサイトの開設やウェブサイト上で遊べる化石発掘ゲームの開発を行いました。また、資料館内では音声ガイドタブレットの貸し出しや、テシオコククジラ化石レプリカの3Dモデルを閲覧できるタブレットの設置など、展示をより楽しめる工夫を続けています。

この町の記憶を繋ぐハブとして、天塩川歴史資料館を長く親しんでいただけるよう日々展示や教育普及活動の進化を今後も続けていく予定です。当館に興味を



公式ウェブサイト上で遊べる化石発掘ゲーム



化石レプリカを360度回転させることができる閲覧アプリ
持っていただけましたら、ぜひ足をお運びください。
最新情報や化石発掘ゲームへのリンクは当館の公式ウェブサイトにてご確認ください。みなさまのご来館を心よりお待ちしております。

ご利用案内

所在地

〒098-3303 北海道天塩郡天塩町新栄通 6 丁目
TEL: 01632-2-2071(冬季休館期間: 01632-2-1026)

開館時間 10:00~17:00 (入館は16:00まで)

休館日 4・10月: 月曜日
5・6月: 第2・第4月曜日
7・8・9月: なし
11月~3月: 冬季休館
そのほか館が定める日

入館料 200円 (高校生以下無料)

北海道の開発と鉄道 —1世紀半の軌跡— 〈中〉



原田 伸一 (はらだ しんいち)

1950年生まれ。函館市出身。室蘭工業大学開発工学科卒業後、1973年4月、(株)北海道新聞社入社。編集局、函館支社長などを経て、2015年6月、常務取締役で退任。以後、鉄道関係の執筆活動に入る。著書に『函館・道南鉄道ものがたり』『海峡の鉄路 青函連絡船 110年の軌跡と記憶』『北海道 国鉄蒸気機関車の記録』『北海道の貨物列車』『年表と写真で見る北海道の国鉄』(共著)(いずれも北海道新聞社刊)がある。総務省北海道管区行政評価局「行政改善推進会議」座長。

黄金期—戦争、そして電化新時代

1929(昭和4)年9月、アメリカの株価の大暴落に端を発した世界恐慌は、海を隔てた日本にも波及し、「昭和恐慌」と呼ばれる混乱に陥りました。その中にあるけれども、日本は欧米列強と並んで軍備を拡張し、中国大陆への進出を既成事実化していきます。世界規模の激動の中で、北海道の鉄道の役割は「生活優先」から「軍事優先」へと転換を迫られました。

◆高性能機関車、食堂車・寝台車も

この頃、日本の鉄道技術は外国人の指導を受けていた草創期に比べて格段に進歩し、欧米をモデルに独自の高性能車両を製造できるようになりました。蒸気機関車(SL)は1913(大正2)年に貨物用9600形、翌1914(大正3)年には旅客用8620形が実用化され、北海道を含めて全国各地で活躍。9600形は1926(大正15)年までに770両、8620形は1929(昭和4)年までに672両を数える“2大勢力”になっていました。

次いで両形式を改良した旅客用18900形(のちのC51形、写真1)、貨物用9900形(のちのD50形、写真2)が製造され、両形式とも北海道では函館本線・室蘭本線など幹線の急行列車、石炭列車の先頭に立ちました。国有化以前は各鉄道が都合に合わせて機関車を導入したため、部品交換などの保守が難しかったのですが、国産機の量産によって費用の削減と効率化が進みました。

こうした実績を基に、1935(昭和10)年からD51形(写真3)の量産が始まりました。「早く大量に作れ」との軍部の指示もあり、機関車メーカーだけではなく、修繕を受け持っていた国鉄苗穂工場でも12両を製造し、北海道で培った技術力を実証。D51形は本来、引張力を重視した貨物用なのですが、急勾配がある函館駅—小樽駅間や旭川駅—北見駅間などでは急行列車にも充当されました。D51形は戦後型も含め、その数は日本最多の1,115両を数え、愛称の“デゴイチ(デコイチ)”はSLの代名詞ともなりました。

併せて客車も急速に進化しました。函館駅と稚内駅及び釧路駅を往復する急行列車には、それぞれ食堂車や寝台車が連結され、高速化とともに旅の楽しさを提供。庶民には高嶺の花でしたが、食堂車のメニューは釧路方面が洋食、稚内方面は和食と指定されており、それぞれ専門の料理人が車中で腕を振るい、高級料理をサービスするようになりました。



写真1 「大正の名機」と称されたC51形蒸気機関車。長万部駅で発車を待つ＝1960年ごろ(原田一夫(筆者の父)撮影)

写真2 登別駅付近で石炭列車をけん引するD50形＝1963年ごろ(原田一夫撮影)

写真3 苗穂工場で製作されたD51形237が引く旅客列車。蘭島駅を発車する＝1970年12月

海外に目を移すと、欧米の鉄道では国を挙げての“スピード競争”が激化していました。特に鉄道発祥の地であるイギリスと、統一国家意識を高めるドイツがライバル同士に。1936（昭和11）年、ドイツの05形が200km/hを記録すると、1938（昭和13）年にはイギリスのA4形「マラード号」が203km/hをたたき出して追い抜きました。この速度は今でも「蒸気機関車による世界最高記録」として輝いています。両鉄道の軌間は標準軌（1,435mm＝日本の新幹線と同じ）で作られており、狭軌（1,067mm）の日本とは車両の規格が違うのですが、欧米の進化が日本に伝わり、高性能車両が続々誕生するきっかけとなりました。

◆開拓地にも線路延伸

この時期、室蘭本線が長万部駅に延伸された他、本線と地方を結ぶ支線も多く建設されました。例えば瀬棚線、広尾線、標津線、興浜北線、深名線（いずれものちに廃止）、上磯線（のち江差線、現・道南いさりび鉄道）、札沼線、日高線などが順次開通していきます。また、夕張や美唄などでは産炭地から石炭を運ぶ専用線が作られたほか、開拓地を支えるため、私鉄や拓殖鉄道（当初は馬車鉄道もあった）も開業しました。これらの鉄道は拠点駅で国鉄線と接続され、北海道特産の水産物、農産物、木材などの輸送が便利になりました。

1940（昭和15）年ごろの道内の主な私鉄を見ると、炭鉱では夕張鉄道、鉱石関係では胆振縦貫鉄道、漁業では渡島海岸鉄道、農業・酪農業では十勝鉄道など、計約30鉄道が営業していました。中でも十勝鉄道は帯広や清水を拠点に路線を計約100kmに拡張し、広い十勝平野の集落を回りながら運行。旅客輸送の他、甜菜（ビート）や牛乳を工場に運ぶなど、“農業王国”と称される十勝地方の基盤づくりに貢献しました。

また、北海道鉱業鉄道は当初、苫小牧駅と鶴川・穂別方面を結ぶ鉱山輸送が目的でしたが、札幌の急速な都会化に目を向け社名から、「鉱業」を消し、1926（大正15）年には沼ノ端駅と苗穂駅を結ぶ札幌線を建設。流線型の新型気動車を導入するなど、先進的な経営に乗り出しました。

◆青函連絡船壊滅、鉄道も大被害

国は1927（昭和2）年度から第2期拓殖計画（20カ年計画）の実施に移り、計画終了時までに移民197万

人を受け入れ、北海道の人口を600万人とすることを目標に掲げました。一方で、日本は中国北部に満州国を建国し、^{ないもうこ}内蒙古を含めて多くの国民に「満蒙開拓」を働きかけ、大陸経営の地歩を固めようとしていました。中国北部を貫く南満州鉄道も建設され、多くの鉄道技術者も満州を目指したのです。このため、北海道への関心は薄れ、第2期計画は途中で立ち消えになりました。

第2次世界大戦中の1941（昭和16）年12月8日、日本はハワイの真珠湾を奇襲してアメリカ、イギリスなどを相手に太平洋戦争に突入しました。政府と軍はこの戦争を予期して1940（昭和15）年、札幌に「北部軍司令部」を設置。戦争開始後は不要不急の貨物の受託を禁止し、軍用列車を最優先するようになりました。

鉄道省は北海道鉄道や胆振縦貫鉄道、渡島海岸鉄道などを買収する一方、1942（昭和17）年から翌年にかけて、道内と本州を結ぶ拠点となる東室蘭操車場と五稜郭操車場を建設。機関車もD51形を一回り大きくした「決戦機関車」D52形（写真4）が作られました。道内では長万部機関区に30両が一括配置され、石炭列車の運行に使われました。また、青函連絡船も「戦時型」と言われる簡易設計の貨物連絡船が「質より量」とばかりに次々と投入されました。

1945（昭和20）年7月14、15日の両日、青森県沖に到達したアメリカ海軍機動部隊の空母から飛び立った300機を超える戦闘機・爆撃機が津軽海峡や北海道を総攻撃し、その結果、貨客船翔鳳丸や貨物船第六青函丸などが沈没するなど、青函連絡船はほぼ壊滅。鉄道施設も各地で攻撃を受け、発展を重ねてきた鉄道輸送は打ちのめされたのでした。



写真4 戦後も貨物列車けん引に力を発揮したD52形。2両の重連で旧仁山駅の急坂を上る＝1965年10月

◆特急<おおぞら>華やかデビュー

同年8月の終戦に伴い、占領軍総司令部（GHQ）が日本を支配する中、北海道の鉄道は再出発に向けて動き出しました。国鉄在職中に招集され、戦地に赴いた元職員が帰還し、それぞれの職場に復帰。戦争中、酷使されて傷みが進んだ車両の整備も始まりました。終戦1年後の1946（昭和21）年12月には、レール供出により休止していた札沼線石狩当別駅－浦臼駅間が復活した他、翌年6月には大規模ダイヤ改正があり、函館駅－旭川駅間に夜行急行列車が設定されるなど、旅客輸送も回復してきました。

青函連絡船は1947（昭和22）年、戦後初の貨客船洞爺丸（写真5）が就航しました。外洋船をイメージさせる美しい船体で、鉄が不足する中、各地から鉄くずをかき集めて鋼材を作り、ようやく建造に至ったといわれています。さらに羊蹄丸、摩周丸、大雪丸が続き、貨物船も追加され、北海道と本州間の輸送は急速に復活していきました。

経営組織は1949（昭和24）年4月、従来の鉄道省直轄を改め、公共企業体（公社）として新たに日本国有鉄道（国鉄）が誕生しました。また1950（昭和25）年4月、北海道開発法が成立し、北海道開発庁が発足。翌年7月には北海道開発局が業務開始となり、主要都市に開発建設部など現業機関も配置されました。

これを受け、1952（昭和27）年4月、第1期北海道総合開発第1次5カ年計画がスタート。これは石炭などをはじめとする資源開発を進めて経済基盤を築くのと同時に、海外からの引揚者などの受け入れを進めて開拓を再起動させることが目的でした。

そうした中、1954（昭和29）年9月26日、大型の台

風15号が来襲し、函館港を出航した直後の洞爺丸が沈没するなどして死者・行方不明者計1,430人に上る「洞爺丸事故」が発生。世界でも稀な大規模海難となり、青函航路は空襲以来の悲劇に見舞われました。洞爺丸は1カ月前、北海道を訪れた（昭和）天皇・皇后両陛下のお召船として脚光を浴びたばかりでした。

1960（昭和35）年代になると、経済成長とともに国鉄の輸送量も増え、本州並みの近代化が図られることになりました。同年10月、桑園駅－秋葉原駅間に急行貨物列車<ほっかい>が運転開始。そして翌1961（昭和36）年10月には、北海道では初めての特急列車となる気動車キハ80系による<おおぞら>（写真6）が函館駅－東室蘭駅－札幌駅－旭川駅間で運転を開始しました。クリーム色の車体に窓回りが赤く塗られたキハ80系は、函館駅－札幌駅間の所要時間をSLけん引急行列車の約6時間（小樽駅経由）から一気に4時間半に短縮。当時はまだ蒸気機関車が主体だった北海道の旅行環境をガラリと変える画期的なデビューとなったのです。青函連絡船も1964（昭和39）年5月、自動化船津軽丸（2代目、写真7）が就航し、以後、同型船が6隻続き、石炭を燃料とする旧型船は姿を消しました。

この頃の北海道開発の動きを見ると、第1期北海道総合開発第2次5カ年計画が終わり、1963（昭和38）年4月から第2期北海道総合開発計画がスタートしました。これは日本の経済成長を背景に、「北海道経済の自立的発展の基礎を固める」のが目標とされ、北海道の産業構造の高度化を目指して苫小牧では臨海工業地帯を開発するほか、農業の経営規模拡大などの近代化、拠点都市の整備、冬期間の道路交通の確保などを推進することになりました。



写真5 函館港を出港し、青森に向かう青函連絡船洞爺丸＝日付不明（原田伸一所蔵）



写真6 13両編成で静狩駅付近を通過する特急（おおぞら）＝1969年8月



写真7 補助汽船（左側）に押されて函館港を出る津軽丸（2代目）＝1965年6月

◆電化完成、「空鉄一体」に転換

北海道経済の自立を目指す議論が高まる中、国鉄は函館本線の「電化」に向けて動き出しました。冬の北海道の酷寒、豪雪の気象条件は余りに厳しく、電化は厚い壁でしたが、技術の進歩で強固な電気設備や耐寒型交流電車の実用化が可能となったのです。小樽駅－札幌駅－旭川駅の電化工事が始まり、1968（昭和43）年8月、小樽駅－滝川駅間で電車711系（写真8）と電気機関車ED75・ED76形電気機関車による運転が始まりました（滝川駅－旭川駅間は翌年10月開業）。同年は「北海道百年」の節目に当たり、記念行事が繰り広げられたこともあり、赤系のえんじ色の電車・機関車は、多くの道民に歓迎されました。

また、強力なディーゼル機関車DD51形が、根室本線など非電化の幹線に集中配置され、その結果、蒸気機関車の活躍の場所は急速に失われます。「日本最大・最強」と言われたC62形がけん引していた函館駅－札幌駅間の急行<ニセコ>も1971（昭和46）年9月にDD51形にバトンタッチ。C62形は勾配がきつい長万部駅－小樽駅間では2両連結（重連）で走行し（写真9）、多くの鉄道ファンの憧れの的となっていました。さらに1975（昭和50）年12月14日、室蘭駅7時50分発岩見沢駅行きが日本の最終SLけん引旅客列車となり、C57形135が「さようならSL」のヘッドマークを付けて走行。同24日には貨物列車も最終運転されました。これをもって1世紀以上にわたって鉄道の主役を務めたSLは、定期列車からすべて姿を消したのです。

◆赤字線問題が深刻化

この間の1968（昭和43）年、日本の国民総生産（GNP）は資本主義国でアメリカに次いで世界第2位となり、札幌を中心にビジネスでの往来や観光もブームになりました。これを反映し、札幌駅－旭川駅間には新型電車による急行<さちかぜ>、特急<いしかり>が続々デビュー。電化は千歳線及び室蘭本線に拡大され、1980（昭和55）年10月、白石駅（分岐駅）－室蘭駅間

の電化営業が始まりました。

合わせて「空の玄関口」に成長した千歳空港に隣接して、千歳空港駅（現・南千歳駅）が国鉄で初めて鉄道と空港を直結する駅として開業しました。駅と空港は道路をまたぐ空中回廊で結ばれ、これを機に本州と北海道との往来は、青函連絡船に代わって航空機が主役となるのです。同年は幌内鉄道開業100年に当たることから、神戸で保存されていた「義経号」を小樽市・手宮に輸送し、小樽交通記念館（当時）の「しづか号」と対面するイベントも行われました。「義経号」は煙を噴き上げて走行を再現し、集まったファンを喜ばせました。

一方、1971（昭和46）年度から第3期北海道総合開発計画が実施され、苫小牧東部大規模工業基地の開発計画や、港湾・空港の整備による交通ネットワークの確立などが盛り込まれました。これにより、道央自動車道など高速道路の建設が本格化。経済活性化とともに「マイカー時代」を迎え、増発された都市間バスは国鉄のライバルとして台頭してきました。小回りの利くトラック輸送も拡大し、国鉄の荷物・貨物輸送は縮小の一途をたどるようになります。

この結果、国の開発計画が進むほど、国鉄の経営が苦しくなる悪循環が顕著になりました。労使関係も悪化し、たび重なるストにより国民の間に「国鉄離れ」も生じます。とりわけ人口が疎らな道内国鉄の採算性は悪化の一途をたどり、赤字ローカル線の“営業廃止”が始まりました。1970（昭和45）年には知床近くの根北線の全線、1972（昭和47）年、札沼線の一部、1978（昭和53）年には士幌線の一部がそれぞれ廃止されました。同時に“脱石炭”の影響を受けて産炭地の炭鉱鉄道や、開拓を支えてきた専用鉄道も雪崩を打ったように消えました。こうした「赤字線問題」は特に北海道で深刻となり、国鉄の経営を根本から揺さぶる課題となっていくのです。

（続く）



写真8 白石駅付近を快走する北海道国鉄初の電車711系。「赤電車」と親しまれた＝1972年8月



写真9 急行<ニセコ>をけん引し、函館本線の急勾配を上るC62形重連＝1969年6月

第3期滝上町まち・ひと・しごと創生総合戦略

滝上町まちづくり推進課まちづくり推進係

1 はじめに

滝上町は北海道の北東部、オホーツク管内の西部に位置し、森林資源と清流に恵まれた自然豊かな農村地域です。「人いきいき町わくわく童話村たきのうえ」をまちづくりの未来像として掲げ、独自のまちづくりに取り組んでまいりました。

本町の魅力を象徴する最大の観光資源が「芝ざくら滝上公園」です。10万平方メートルにも及ぶ広大な公園一面が鮮やかなピンク色の芝ざくらで埋め尽くされ、国内外から多くの観光客が訪れます。さらに町の中心部を流れる渚滑川^{しよごつがわ}の渓谷「錦仙峡」^{きんせんきょう}は美しい日本の歩きたくなる道500選に選出され、多彩な鳥類を観察することができ、また、渚滑川の「キャッチアンドリリース」の取組みが道内外の釣り愛好家から高い評価を得ております。近年は、芝ざくらや本町の歴史的シンボルでもあり特産品の和ハッカ等の香りを活かしたユニバーサルツーリズムの取組みにも力を入れています。

また、北海道が推進するヒグマゾーニング管理計画にいち早く取り組み、人工知能（AI）とドローンを連携させた即時監視によるヒグマ対策を強化に取り組んでいます。



芝ざくらの甘い香りが漂う芝ざくら滝上公園



まちの中心部を流れる渚滑川「錦仙峡」の美しい紅葉

2 人口の推移

本町の総人口は、国の高度経済成長期を前にした1961（昭和36）年9月に14,214人に達し、1954（昭和29）年に見舞われた台風15号の影響による国有林の風倒木処理のため、人口が急増しました。しかし、それ以降は一貫して減少の道を辿り続け、2025（令和7）年度に実施した国勢調査の速報値では、人口2,097人、世帯数1,101世帯となっております。

国立社会保障・人口問題研究所（社人研）が2023（令和5）年に算出した「日本の地域別将来推計人口」では社会動向がこのままで推移した場合、2030（令和12）年には1,890人と2,000人の大台を割り込み、2050（令和32）年には1,140人と2020（令和2）年時点の半分にまで落ち込み、2060（令和42）年には870人まで減少するとされています。この減少スピード及び減少割合は周辺の近隣市町村と比較しても非常に早く、その背景には本町の高い高齢化率と自然減少率の高さ、また進学や就職による若年層の転出、女性の転出超過傾向等が要因と分析されます。

このような状況から出生数を増加させる自然減抑制対策と転出抑制・転入増加を狙う社会減対策を車の両輪として統合的かつ体系的に推進していくことが不可欠であるという結論に至りました。

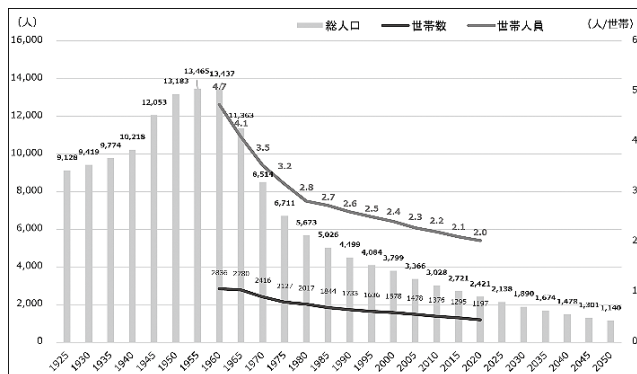


図1 滝上町の人口推移と将来推計（人口ビジョン）

3 滝上町まち・ひと・しごと創生総合戦略の概要

「第1期総合戦略」ではくらし、雇用、交流、結婚・子育ての4つの基本目標を柱にバイオマスタウン構想の推進、基幹産業の担い手の育成・強化及び確保、まちの魅力を活かした移住・定住政策への展開、充実した子育て支援環境の提供等の施策を進め、人口減少や少子高齢化に対応してまいりました。しかし、第1期総合戦略の数値目標・重要業績評価指標の進捗状況を鑑みると70%の進捗率に達した項目は全体の6割程度にとどまり、目標人口達成のためには粘り強い人口減少対策に取り組む姿勢が求められました。

「第2期総合戦略」では、第1期の検証結果を踏まえ、これまでの枠組みを継承しつつ、それぞれの基本目標のもとで新たな課題や社会情勢の変化に対応できるよう、見直しを行いました。

しかし、第1期総合戦略による取り組みが始まった2016（平成28）年からの実際の人口推移と人口推計を比較したところ、社人研の人口推計ライン通りの傾き（減少率）で減少を続けており、依然として合計特殊出生率の低下傾向や社会減に歯止めをかけることができていないといった結果になりました。

4 第3期滝上町まち・ひと・しごと創生総合戦略

第3期総合戦略では、人口減少に歯止めをかけ、移住・定住地として選ばれる魅力的なまちづくりを進めていくために、本町の個性や強みにこだわりながら総合的な観点から施策を推進することを主眼とし、『地域の魅力や強みを活かし、人口減少対策と活力ある地域づくりを推進する』という戦略目標を設定しました。

（1）基本目標と具体的な施策

【基本目標1】「くらし」

～誰もが“くらし”続けたいと思えるまちづくり～

自然環境に恵まれ、都会にはない魅力的な農村生活を送ることができる本町の強みを活かすためには、町の景観が整備され、生活インフラの整備・充実が必要不可欠です。また、地域の安全・安心な生活を支えるため、医療・保健・福祉・救急といった人命や健康にかかわるサービスの他、公共交通、買物環境といった住民の日常生活に直結する利便性の確保が重要です。

<具体的な施策>

- ①空き家対策によるまち並み整備
- ②魅力的な農村生活を支える生活基盤整備
- ③住民が安心して暮らせるための医療・保健・福祉と地域公共交通対策の推進
- ④住民が安全に生活できる基盤整備と体制づくり
- ⑤住民の生活に直結する商業等の活性化による住民生活の利便性向上

【基本目標2】「担い手」

～地域の“担い手”確保と地域産業の振興から

稼ぐ地域への展開～

基盤産業である農業と林業の担い手確保はもとより、建設業、製造業、各種サービス業等様々な地域産業において課題となっている担い手確保対策を推進します。また、和ハッカや七面鳥等の他地域にない特産品が地域の知名度向上や産業振興に寄与していることから、地域の特徴や強みを捉え、強い産業づくりと地

域の主要産業の振興を図り稼ぐ地域づくりを進めます。

<具体的施策>

- ①就業支援や地域の魅力発信による農業・林業等の地域産業の担い手確保
- ②町内における起業や新規事業への支援による多様な担い手の確保と育成
- ③人材定着のための多様な支援による雇用対策の推進
- ④地域資源を活用した農業・林業の振興と農産品・木材製品の生産流通強化
- ⑤和ハッカや七面鳥などの特産品の生産流通強化
- ⑥木質バイオマス等の再生可能エネルギーや地域資源を活用した新産業の創出

【基本目標3】「交流」

～滝上町との“交流”から移住・定住への展開～

芝ざくらや渓谷「錦仙峡」、釣り等の観光資源を活かしたプロモーションや観光客の誘客を通じた交流人口の拡大、関係人口への展開を図り、移住定住へと結びつけます。

町外からの移住者を受け入れるための若年単身者や子育て世代等のニーズに即した住環境づくりの支援を推進します。

<具体的施策>

- ①芝ざくら・渓谷・釣り等の地域資源を活かした観光施策による交流人口の拡大
- ②移住支援の強化と移住関連情報の発信強化
- ③町外の企業や大学等との連携による交流促進
- ④若年単身者や子育て世代のニーズに対応した魅力的な住まいの整備
- ⑤空き家の活用とも連動した持ち家の取得支援

【基本目標4】「子育て」

～若年世代の定住から結婚・出産・“子育て”への展開～

若年層の出会いや交流の機会創出のみならず、結婚生活支援、雇用対策、住環境整備等地域における出会いから結婚までの総合的な支援環境づくりを推進しま

す。また、結婚から出産・子育てへの希望を持ち、安心して希望をかなえられる子育て支援を行い、「滝上で子育てをしたい」「滝上に住みたい」という意識の醸成を目指します。

<具体的施策>

- ①地域資源を活かした住民同士の交流拡大による若年世代の交流の機会づくり
- ②結婚から定住への切れ目のない支援
- ③妊娠から出産・子育てまでの相談支援や保育サービス等の支援環境の充実
- ④子育てに関する経済的支援の充実
- ⑤少人数ならではのきめ細やかで地域の特徴を活かした教育環境づくりと進学支援の推進

(2) 取組事例

①令和8年度からスタート！いきもの係の取組み

(住民が安心安全に生活できる基盤整備と体制づくり)

2020（令和2）年から4年連続で起こったヒグマによる人身被害やエゾシカなどを含む1億円にのぼる農業被害を食い止め、住民が安心して生活できる環境を整えるため、野生動物による被害防止と人と自然の共生を目指し、農林建設課内に専門部署「いきもの係」を新設しました。野生動物の専門的知見を持つガバメントハンターを配置し、人工知能（AI）とドローンを連携させ即時管理システム構築を目指し、駆除だけによらず、生態データの収集や予防的対策に取り組んでいます。



芝ざくら公園開園前に巡回パトロールを行う「いきもの係」

②たきのうえ市場オープン！

（住民の生活に直結する商業等の活性化による住民生活の利便性向上）

中心市街地における買物弱者対策として生鮮三品を提供する公設民営の「まちなか活性化貸店舗」から令和7年9月をもって事業者が撤退したことにより、後継事業者を募集し、2026（令和8）年5月28日に「たきのうえ市場」がオープンしました。商品の仕入れは「コープさっぽろ」が協力し、町独自の支援策（商業後継者・担い手チャレンジ応援補助金）や地域金融機関と連携した支援策（中小企業融資制度要綱）により、地域の安定した買物環境を整えました。



たきのうえ市場の開店に生鮮食品を買い求める住民

③令和7年4月こども家庭センター開設 （妊娠から出産・子育てまでの相談支援や保育サービス等の支援環境の充実）

これまで、母子保健分野（妊婦健診・母子手帳発行・乳幼児健診等）を担当していた子育て世代包括支援センターと児童福祉分野（児童手当やこども園入園関係等）を担当していた子育て支援係が一体となり、2025（令和7）年4月からこども家庭センターを開設しました。妊娠期から出産、子育て期において切れ目なく応援する体制を整えました。

また、「子育て」「まなび」「おでかけ」「イベント」「相談窓口」のテーマごとに本町で受けられる制度やサービスをわかりやすくまとめた『子育てガイドブック』を作成し、デジタル版と冊子を配付しています。



滝上町公式ホームページでデジタル版を閲覧できます

5 おわりに

本町が直面する老年人口減少の「第3段階（超高齢化）」という現実、一刻の猶予も許されない極めて深刻な地域課題です。過去の総合戦略が人口推計の減少ラインの傾きを崩せなかったという厳しい客観的事実を全町あげて真摯に直視し、これまでの施策の在り方を粘り強く、かつ戦略的に刷新していかなければなりません。

しかしながら、本町には先人たちが大切に培ってきた「芝ざくら」「錦仙峡」等の観光資源、日本一の「和ハッカ」や希少な「七面鳥」といった独自の地場産品、「農業・林業・観光」という強固な経済基盤があります。地域が一丸となり、山積する課題をひとつずつ乗り越え「人いきいき町わくわく童話村たきのうえ」の持続可能で輝かしい未来を全力で創造していきます。

ガストロノミックツーリズム in 北海道

～食と文化の観点から地域を見つめ、北海道を学ぶ旅～

第13話 「上川」

遊佐 順和 (ゆさ よりかず)

公立大学法人旭川市立大学 地域創造学部地域創造学科 教授

東京都出身。北海道大学大学院教育学専攻修了。大学卒業後、日本フィルコン株式会社、池脇会計事務所、AIR DO北海道国際航空株式会社、株式会社ホテルオークラ札幌などの勤務を経て、2010年より札幌国際大学に奉職し、2025年より現職に就く。本務の傍ら、内閣府地域活性化伝道師、北海道住宅供給公社理事、旭川市工芸センター運営委員会委員、旭川市国際交流委員会委員長、一般財団法人北海道開発協会評議員、一般社団法人和食文化国民会議全国「和食」連絡会議「和食」地域特派員なども兼務する。



今回は北海道中央部に位置し、南北約224kmにもおよぶ非常に広大な上川管内をご紹介します。豊穡の秋、上川管内の農作物には作付面積や生産量で日本一、道内一の大地の恵みが数多くあります。上川管内北部、中部、南部のまちを実際に旅し、各地で見つけたその土地ならではの素晴らしい食や文化、自然などのなかから、特に印象に残るまちを幾つかをご紹介します。

雄大な十勝岳連峰の眺望と大地の幸多き「富良野」

上川管内南部の上富良野町には、道内最高所で標高1,280mに温泉宿「十勝岳温泉 湯元 凌雲閣」があります。宿は1959（昭和34）年、創業者の會田久左エ門氏が泉源を発見し、当時は道もなく人力で資材を運び63（同38）年に創業、現在3代目（代表：青野範子氏）です。冬場の送湯管点検は命がけの作業を伴う困難さもありますが、創業者の意志が大切に受け継がれるとても貴重な宿です。宿は永年にわたり十勝岳登山者や観光、湯治やスキー客など、名湯好きな多くの利用者にこよなく愛されてきました。宿からはほかでは見ることのできない富良野盆地の絶景を一望できます。

上富良野町は、豚一頭からわずかししか採れない部位「豚サガリ」の発祥地といわれ、町民のソウルフードにもなっており町内には多くの焼肉屋があり、永年にわたり町民から愛された製法を受け継ぐベーコン屋もあります。また、上富良野町は道内で唯一、商業用ホップが栽培されるまちで、サッポロビール原料開発研究所や、生きたホップにこだわり美味しさを追究するクラフトビール「忽布古丹醸造」もあります。



上富良野町 北海道最高所の銘宿 十勝岳温泉 湯元 凌雲閣
「施設外観、めんこいエゾクロテンのお出迎え、晩酌（忽布古丹醸造のビールときやらうえいのベーコン）、朝食」



上富良野町 焼肉まるます「店舗、満喫プレミアム定食」
※ 豚サガリをはじめさまざまな部位を七厘で焼いて味わえます

このほか、富良野地方には古民家を改装した店舗や、十勝岳連峰の絶景を借景に眺め非日常の至高の空間でゆったりと寛ぎ、渾身の想いで淹れた珈琲とスイーツ、素材にこだわるスペシャリテのヒトサラをゆったりいただける個性的なカフェなども数多くあります。



上富良野町 Furano Café「店舗外観、ケーキセット」
※まちなかで静かに佇む心地よく寛げる設えのカフェ



富良野市 halu CAFÉ「短角牛のバスタ、店内設え」
※元東京交響楽団奏者のご夫妻が営む至高の空間



富良野では盆地特有の寒暖差やぶどう栽培に適した恵まれた土壌を生かし、高品質のぶどうが栽培されています。富良野市が経営するふらのワイナリー（富良野市ぶどう果汁研究所）は、永年にわたり国内ワインコンクールで多くの入賞を果たしています。これに次いで近年注目を集める新進気鋭のワイナリーも多く、富良野は数多くの魅力的なワインと出逢える土地です。



上富良野町 多田農園「ワイナリー看板、ミュラー・トルガウ」



中富良野町 ワイナリー ドメーヌ・レゾン
「店舗看板、2025年日本ワインコンクール金賞受賞「貴腐ワイン」」



いちご栽培歴100年と千本ねぎのまち“比布町”

上川管内中部の比布町では、1921（大正10）年頃から農家が自家消費用に栽培したのを契機に100年以上にわたりいちご栽培が続いています。現在は「けんたろう」「ゆきララ」「赤い妖精」「紅ほっぺ」などが栽培されています。例年6月下旬～7月上旬には、町内の露地栽培の畑で「いちご狩り農園」がオープンし、それにあわせ町内のカフェやパン屋ではいちごを利用した各種スイーツやパンが提供され、旬の恵みをお目当てに多くの観光客がいちごの里・比布町を訪れます。



片澤農園「いちごと千本ねぎの畑、鈴なりのいちご」



NANA PLAZA
「冬いちご紅ほっぺのパフェ」



ビビカフェ比布駅
「いちごの各種スイーツ」



比布町 Calmiss Cafe「ワンプレートランチといちごのサイダー」「いちごねーど、いちごのシフォンケーキ」



和寒町 塩狩峠「峠越えの列車、塩狩峠記念館」
※ 作家 三浦綾子氏の代表作『塩狩峠』の舞台地、氏の旧宅



きのこの里“愛別町”

愛別町は道内きのこ生産量約9割を占め、町内のいたるところに看板「きのこの里」があります。まちの中心部には、きのこたっぷりのそばや豚バラ肉を煮込んだ定食をいただける食堂もあります。



愛別町 愛別食堂おちこち
「豚角煮定食、きのこそば、地元産ビーツのソース」

かぼちゃと越冬キャベツの名産地“和寒町”

和寒駅からほど近い和寒田舎酒家「冬音」では、冬場になると美酒に酔いしれ和寒名産の越冬キャベツやかぼちゃの料理に舌鼓を打ち、^{たの}愉しいひとときを紡ぎます。和寒駅となり塩狩駅は名作『塩狩峠』の舞台となり、駅近くには木立ちに囲まれた著者自宅（現塩狩峠記念館）があり、作品に込められた尊き実話を語り継ぐためにも塩狩駅は非常に貴重な存在です。駅前には見事に咲き誇る「一目千本桜」があり、駅を見守るように建つ手作り宿「塩狩ヒュッテ」では、大切な駅を守るための存続活動にも取り組まれています。



和寒町 塩狩ヒュッテ「施設外観、心温まる夕食」
※ オーナー合田夫妻が手作りで建てた心安らぐ至福の銘宿



わが国の代表的なもち米の里“名寄市”

上川管内北部の名寄市では、市内の水田の約9割がもち米という、日本有数のもち米産地です。名寄市は昼夜の寒暖差により病虫害の発生が少なく、クリーンな栽培が行えるという地域性を生かし、1970（昭和45）年よりもち米栽培が始まりました。地元道の駅でもち菓子や料理を楽しむことができ、道外では三重県伊勢神宮参道で1707（宝永4）年創業の老舗菓子店赤福の銘菓「赤福餅」や、1996（平成8）年より外食大手モスバーガーで冬場の人気メニュー「玄米もちじるこ」など、名寄産のもち米が全国で注目を集めています。



和寒町 和寒田舎酒家 冬音
「越冬キャベツのホルモン鍋、かぼちゃのコロッケ」



名寄市 道の駅もち米の里なよろ
「夏限定 アスバラと餅のかき揚げ丼」



三重県伊勢市
赤福本店「赤福餅」

豊かな森林資源を生かす森と匠の村“音威子府村”

上川管内北部に位置する音威子府村は、北海道一人口の少ない村として知られていますが、かつては世界的に著名な彫刻家砂澤ビッキ氏がこの地の豊かな自然に魅せられ移り住み、工房を構え創作活動に取り組み、数々の作品を完成させました。現在、工房は「砂澤ビッキ記念館」として、生前砂澤ビッキ氏が創作した1,000点のうち約200点あまりの作品が展示されています。館内の重厚感溢れるカフェコーナー「いないいないばあ」では、カウンターにビッキ氏の作品が多くあり、審美眼が磨かれる空間です。



音威子府村 茂島 彫刻家 砂澤ビッキ記念館
「砂澤ビッキの力強い作品、いないいないばあ」



音威子府村 駅そば音威子府
「店舗カウンター、天ぷらレジェンド（黒そば）」



下川町 手延べうどんみなみ家
「天ぷらうどん」



幌加内町 そばごう
「ぶっかけそば」

美味探訪！そば、うどんを巡り麵で紡ぐ“上川”

上川管内には日本一の作付面積、生産量を誇る幌加内町をはじめ、そば生産や手打ちそばの盛んな地域や、特徴ある麵で永年多くのファンに愛される駅そばなど全国的にも有名なそば処が多くあります。また、下川町にはかつて道内製麵大手「菊水」（江別市）の前身「杉野製粉製麵所」があり、この製粉製麵所をヒントに手延べ麵が広がり、「日本最北の手延べ麵のまち」を掲げ、町の特産品になっています。



幌加内町 日本一のそばのまち「そば畑」
（写真提供：幌加内町地域振興室）



比布町 ビピカフェ比布駅「きのこそば、店内設え※」
※ 樹木希林さん著書（ビップエレキバンにちなみ比布駅を訪問）



旭川市江丹別 そばの里江丹別「店舗外観、天ざる」
※そば店の並びには、日本航空国際線ファーストクラスに搭載実績のあるチーズ工房「伊勢ファーム（ブルーチーズ）」もあります

【連載】

北のサクラ

彩る

歴史と文化

第1回

城下町・松前の八重桜



森林インストラクター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として小樽、釧路、函館などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。2016年森林インストラクターの資格取得。現在、日本森林インストラクター協会会員、道新文化センター講師。

サクラはこれから紅葉の季節を迎え、休眠に入ります。そして雪解け後、木々が文字通り桜色に染まり、春を待ち焦がれていた人々の心を躍らせます。

サクラをめぐる習慣が始まったのは平安時代。野山に自生するサクラを庭に植え替え、貴族たちがその風情を楽しむ宮廷文化に端を発します。一方、農村でもその年の豊作を願い、山桜の下で飲食をする習わしがありました。

そうした風習が次第に大衆文化として庶民の生活に溶け込んでいきます。サクラの木々に囲まれ酒宴を繰り広げる花見は日本独特の文化です。

城下町として早くから栄えた道南の松前では、江戸時代に植えた八重桜が町のシンボルとして大切に育てられ、花見の主演となっています。

シンボルの血脈桜

「250種、1万本の桜」とうたう松前公園。なんといっても最大の特徴は種類の豊富さです。4月中旬から5月下旬まで、早咲き、中咲き、遅咲きとさまざまな花を楽しむことができます。

この多品種の背景にあるのは、北前船で関西との交易が盛んだったことや、参勤交代で江戸との往来があったことです。人や物が行き来する場所では、いろいろな知識や情報も手に入ります。その結果、より美しく珍しいサクラを求めるようになりました。

美しさを象徴しているのが、松前城の北側にある光善寺の「**血脈桜**」です。高さ8メートル、横幅17メートルの古木で、本州から持ち込まれ、樹齢は300年を超えると推定されています。



咲き誇る光善寺の血脈桜

八重桜で栽培品種名は「**松前早咲**」ですが、一般的には「**南殿**」と呼ばれています。淡いピンク色の大輪は気品すら感じさせます。その血脈桜には次のような伝説があります。

昔、松前の鍛冶屋の父と娘が関西に旅行に出かけ、美しい尼からサクラの苗木をもらって帰ります。光善寺に献納し、人々を喜ばせたのですが、寺の本堂を建て直す際、大きくなりすぎたため伐採することが決まります。

ところが、前夜、住職の枕元に乙女が現れ、「血脈をください」と懇願します。血脈は死人が仏になれるよう僧侶が与える書簡です。住職はお経を唱えて血脈を渡しました。翌朝、その血脈はサクラの木にあったのです。驚いた住職は伐採を中止し、大切に育てることにしたということです。

1887（明治20）年創刊の北海道毎日新聞は翌年5月15日、「光善寺本堂前にある血脈桜と称する名樹あり是は福山（現松前）一等の誉と云うべき花」と紹介しています。

この名木を函館出身の作家宇江佐真理さんは小説「血脈桜」で取り上げました。松前藩主の正室光子が光善寺を訪ね、「血脈桜の前まで来ると、光子は感歎の声を上げた。幹が途中から二つに分かれた樹は、思うままに枝を^{ひろ}げ、びっしりと花を付けた様子は圧巻だった」と表現しています。

そして、あとがきで「緑の^{こけ}苔の上に大きく枝を^{ひろ}げた桜は、北海道の桜というより、どこか京風の匂いが感じられます」と記しています。

松前桜の生みの親

松前の桜見物はすでに江戸時代から始まっており、1888（明治21）年5月18日の北海道毎日新聞は「観桜の遊歩人は当時不漁にも係はらず陸続と出掛け朝より晩まで引きも切らず」の状態で、「茶屋割烹店^{かっぽう}は上景気なり」と伝えています。

不漁とはニシン漁のことです。漁を終えた網元の漁師が別れの酒盛りをしたり、実業家が使用人を慰労する宴会を開いたりし、花見へと発展していきました。

松前に置かれていた松前支庁は1903（明治36）年に廃止され、函館支庁に統合されます。これに伴い、豪商が次々と函館や小樽、釧路へ転居します。ニシンも不漁となり、マチは衰退し、けんかも絶えませんでした。

そんな中、サクラに活路を見いだそうとしたのが地元出身の鎌倉兼助^{かまくらかねすけ}です。1907（明治40）年に役場勤めとなり、出張で函館を訪れた際、函館公園のサクラを



鎌倉兼助頭彰碑の肖像レリーフ

見物します。咲き誇る木々の下で、人々が三味線や太鼓を鳴らし花見に興じる光景に驚かされました。

「松前にもサクラがほしい。平和が必要だ」と痛感した鎌倉は、住民の心を一つにするため、サクラの植栽に取り組みます。松前では明治維新後、大きくなったサクラの木は日陰ができ邪魔だなどの理由で伐採されていました。

伝統ある南殿などのサクラを接ぎ木で増やすため1917（大正6）年には、東京から台木となるソメイヨシノの苗木を30本購入します。接ぎ木は成功し、3年目には花のつぼみができるまでになりました。

さらに圃場^{ほじょう}を造るため、クマザサの密集地を開墾します。休日のみならず、平日の出勤前や退庁後にもクワを手にしました。「公務多忙なときでも、朝は三時半起床、夜は十時就寝」（北海道新聞1957年5月12日）という毎日でした。

台木の確保にも腐心しました。富士山の中腹に寒さに強い木があると聞き、さっそく現地へ向かいます。付近の吉田口まで行きましたが、旅館の主人から「危険だからやめた方がいい。私を取り寄せて送ってあげるから」と諭されます。

代金を前払いして帰ると翌年、20本の苗木が届きました。生育が良く、順調に育ち、台木の心配もなくなります。ところが、今度は盗掘する不心得者が現れ、ガス灯をぶら下げ深夜まで見回りする苦労が続きました。

鎌倉は毎年、さまざまな苗木を自費で公園に200～300本も植える活動を1955（昭和30）年ごろまで継続します。その間、役場では助役、収入役という要職を務めていました。

こうした献身的な努力が評価され、1965（昭和40）年には名誉町民第1号に選ばれます。松前公園には肖像レリーフをはめ込んだ顕彰碑が建立され、翌年除幕式が行われました。その2年後の1968（昭和43）年、90歳で亡くなります。

観光振興を託され

松前公園では1933（昭和8）年ごろから、夜桜見物のため電飾が行われていましたが、日中戦争が始まると翌年の1938（昭和13）年には中止されました。

戦後、花見への期待は高く、1947（昭和22）年には早くも第1回のさくら祭りが開催されます。しかし、電力不足のため、町民に家の電気を消し、公園で夜桜を楽しむよう呼びかけました。夜の公園では野外映画会、のど自慢大会などの行事が繰り広げられました。



サクラに囲まれる松前城

公園内の松前城は1949（昭和24）年に焼失し、復元したのは1961（昭和36）年です。これを機に、町は周辺地域を整備し、観光客の誘致を目指します。

その一環として「教育植物園」づくりが浮上し、調査の一員に委嘱されたのが浅利政俊^{あさり まさとし}さんでした。1953（昭和28）年、松前町内の小学校に新卒で赴任した浅利さんは、サクラに魅せられ町内の木々を調べていました。

結局、植物園はサクラをテーマとする教育、研究施設の「桜見本園」に変更され、浅利さんも基本構想の策定に加わり、1965（昭和40）年にオープンします。



品種が充実している桜見本園

浅利さんは当時、新品種づくりに取り組んでいました。町内に多い南殿は八重咲で種子が付くのはまれですが1959（昭和34）年夏、児童たちと種子を集めて回りました。それを苗床で育てると翌年、芽が10本出ました。

苗木を接ぎ木で増やしたところ、南殿とは違う形質のサクラが現れました。花卉が南殿より2倍も多い八重桜です。それが新品種第1号となり、「松前綾錦^{まつまえ あやにしき}」と命名しました。

以来、自然交雑に加え、異なる品種を人為的に交配させるなどして100以上の新品種を誕生させました。そのほとんどは八重桜です。種子ができることが少ないため、品種改良は簡単ではありません。長年の功績は国内外で高く評価されています。

桜見本園は当初、サクラが60本ほどしかありませんでしたが、静岡県三島市の国立遺伝学研究所や「サクラの通り抜け」で有名な大阪の造幣局、日本花の会などから珍しい品種を譲り受けたほか、浅利さんが生み出した新品種も加え、110種300本にまで充実しました。さらに、1979（昭和54）年には新桜見本園も造成され、新たに100種110本のサクラが咲き誇る花園となっています。

国際交流に努める桜守

1972（昭和47）年の日中国交正常化の折には、浅利さんが行政に働きかけ、記念の品として松前の南殿や関山など5品種10本の苗木を北京市に贈り、喜ばれました。

1993（平成5）年、英国の王立公園から苗木の購入希望があった際には、第2次大戦中、函館の捕虜収容所で英国人に過酷な労働を強いたことへの償いとして、自身が作出したサクラ58種を無償で寄贈しました。以来、松前のサクラは英国各地に普及し、このうち19種が卓越した品種だとして英国王立園芸協会の「ガーデンメリット賞」に選ばれました。

2016（平成28）年には同協会の会員が来日したのを記念し、浅利さんが建立した「日英讃桜文化友好親善記念碑」の除幕式が公園内で行われました。碑の表には友好親善の歴史、裏には同賞を受賞したサクラ19種の名前が刻まれています。2018（平成30）年にはこのサクラを紹介する写真パネルが碑の両脇に設置されました。



中央が日英讃桜文化友好親善記念碑

浅利さんはこのほか、ブラジル、ポーランド、米国などへも苗木を寄贈しました。また逆に、英国、米国産のサクラも贈られ、見本園で咲いています。2023（令和5）年には英国のサクラ研究者が視察に訪れ、浅利さんらと親睦を深めました。

浅利さんは2005（平成17）年、日本さくらの会の「桜守」に選ばれ、2010（平成22）年には北海道地域文化選奨特別賞、翌年には北海道新聞文化賞を受賞します。

95歳の今も、サクラへの愛情は衰えません。長い経験で実感したのは、桜花の美しさが日本だけではなく、世界の人々を魅了することでした。サクラの果たす役割は大きいだけに、国際交流を推進するには「松前が国際化しなければならない」と願っています。



サクラの魅力を語る浅利政俊さん

<主な参考資料>

- ・白幡洋三郎「花見と桜」八坂書房、2015年
- ・宇江佐真理「血脈桜」『蝦夷拾遺 たば風』文春文庫、2023年
- ・野呂希一撮影、浅利政俊解説「北国の桜」ノースランド、1995年
- ・鎌倉兼助「北海道開発振興功労者の声」（録音資料）北海道立図書館所蔵、1965年
- ・武田勇作「明治の花見あれこれ」『松前藩と松前 松前町史研究紀要』第27号、松前町史編集室、1987年
- ・松前町史編集室編「松前町史 通説編第二巻」松前町、1993年
- ・浅利政俊「私のなかの歴史 花のもとにて我生きん」北海道新聞夕刊2006年5月8～22日

ひとびとの想いが育てる博物館文化 ー札幌市博物館活動センターを例にー



田中 嘉寛 (たなか よしひろ)

博士(古生物学) 札幌市博物館活動センター・学芸員

北海道大学総合博物館・資料部研究員 沼田町化石館・特別学芸員

ニュージーランド、オタゴ大学でイルカ化石を研究して博士号を取得しました。2024年から札幌市博物館活動センターの学芸員として勤務し、2025年にサッポロクジラの論文を出しました。古生物学と博物館学が専門。本稿でも紹介している資料活動、研究活動、交流活動という「博物館主要機能」を結合させる活動事例とその歴史に興味を持って、博物館学の研究を行っています(田中, 2025, 2026: 末尾参照)。

はじめに

前回は、サッポロクジラの発見、発掘、クリーニング、研究に関わられた方々の「活動」と、その活動に関わったおおぜいの方々の「想い」について紹介しました。化石の発見、発掘、クリーニング、研究と、おおぜいの方々が長い時間かけてとりくみ、ついにサッポロクジラは新種になり展示になって、さらにおおぜいの方々の目にふれるようになりました(図1)。

おもえば「これってすごい」ことです。「知りたい」「後世に残したい」「ひとびとに伝えたい」そう想い、

おおぜいの方々がサッポロクジラによりそってこれられました。

2026年5月30日にオープンしたばかりのサッポロクジラホールでは、実物のサッポロクジラの頭骨を常設展として見るができます。また、サッポロクジラに関わった方々の「想い」をテーマとして活躍を紹介するパネルを展示しています(図2)。ぜひ、札幌市博物館活動センター(札幌市、豊平区)にいらしてください。



図1 サッポロクジラの復元画、前回ご紹介した北海道の足寄動物化石博物館の新村龍也学芸員の作。Cited from Tanaka et al. (2025) .



図2 サッポロクジラホール。札幌市博物館活動センターの展示

今回は、札幌市博物館活動センターのイチオシ化石を紹介しつつ、当センターを見にいらした方々の「想い」を読者のみなさんに紹介し「博物館文化」について広く考えてみたいと思います。

札幌市博物館活動センターの展示をみた方々の想い

おおぜい関わったサッポロクジラについて、研究の結果「世界一」の保存状態だということがわかりました（図3）。なにしろ、頭から腰のあたりまで連結した状態で見つかったのです。サッポロクジラがどの

ようなクジラなのか、これまで知られている化石種と比べていくうちに「あれ、サッポロクジラは化石として見つかった部分の多さで考えると、セミクジラ科としては世界一だぞ」と気がつきました。

実は、いままでセミクジラ科の化石はいくつか知られていますが、サッポロクジラほど良い保存状態のものはありませんでした。そのため、昔のセミクジラ科がどのような体つきだったかよくわかっていませんでしたが、サッポロクジラによって意外と細い体つきであったことが明らかになりました（図1）。現代のセミクジラ科とは大きな違いです。サッポロクジラについては私たちはさらに研究を進めており、セミクジラ科の進化についてもっと詳しいことがわかるようになると期待しています。

ところで、札幌市からはサッポロクジラだけでなく、サッポロカイギュウという7メートルクラスのカイギュウ化石も見つかっています（図4）。サッポロクジラは全長12.7メートルだったと考えています。そのようなことから、およそ900から800万年前の札幌市には巨大な海のは乳類たちがくらしていたこともわかつ

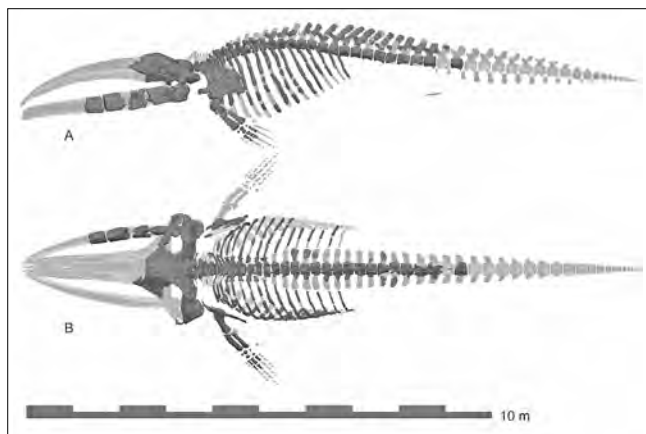


図3 サッポロクジラの保存部位（濃い色）を示す図。
Cited from Tanaka et al. (2025) .



図4 サッポロカイギュウの骨格。札幌市博物館活動センターで展示として見るすることができます

てきました。こんな大昔のこと、ふだんはあまり意識しないと思いますが、札幌市博物館活動センターでは実物の化石とともに、太古の札幌のことを想像し、楽しむことができます。

そんな札幌市博物館活動センターを見にいらした方々の「想い」をご紹介しますと思います。2024年に、札幌市博物館活動センターにメッセージボードという展示コーナーを設けました（図5）。見た目はただのホワイトボードとフセンなのですが「ひとびとの想いを形にしてくれる重要な仕組み」だと思っています。

札幌市博物館活動センターに来てくださった方々のメッセージを読むと、次のような「想い」があることに気がつきます。

- ・見たい、知りたい、理解したい
- ・その過程で得た感情の動きを誰かと共有したい
- ・心に刺激を得たい

ひとびとが成長し、健康な心を維持する上で良い刺激が必要とされています。札幌市博物館活動センターもそのような刺激を得る場となっていたらうれしいことだと思います。



図5 札幌市博物館活動センターのメッセージボード。当センターを訪れた方々の想いが形になっています

くらしのなかに博物館

ところで、文化という言葉には、広い意味と狭い意味など、さまざまな意味があります。ひとびとの日常生活における行動や判断の基準としての「文化」という言葉の使い方もあります。

私が思う「博物館文化」は「くらしのなか」に博物館があることです。「くらしのなかに博物館って、どんなかんじ?」と思われる方もいると思います。札幌市博物館活動センターに来てくださった方々のメッセージは、博物館のあるくらしを考える上で、深い洞察を与えてくれます。それは「見たい」「知りたい」「理解したい」「その過程で得た感情の動きを誰かと共有したい」「心に刺激を得たい」という想いでした。ここに現れる心の動きは、衣食住とはちょっと異なるものの、人間としての欲求といってもいいと思います。特に、心の刺激、あるいは心の栄養素といってもいいかもしれませんが、博物館でとりこむことができるのです。

ぜひ、通いやすく、ご自分にとって居心地の良い博物館を見つけ、足しげく通って見ることをおすすめします。博物館はスルメのように長くじっくり味わえます。同じ展示を何度見ても良いのです。見る側の心境が変わると、気がつくことも変わります。心に受けた刺激をじっくりと味わってみると、すでにくらしのなかに博物館があることでしょう。

博物館文化とは

このように考えてみると、博物館文化とは特別なことにかぎりません。週末どこに行こうかな?と思う行き先のなかに博物館が入っていると、文化的に豊かなくらしに博物館は欠かせない、と思う方々がいることが博物館文化があるということだと思います。そのようなひとびとの想いがあるからこそ博物館文化が成り立つため、博物館文化は「モノ」や「場」だけでは成り立ちません。つまり、博物館文化を維持するためには、いくつかの要素をそろえていく必要があるのです。それらの要素のなかでも、博物館文化を維持し、成長

させるには、まず「想い」を持つ「人」が不可欠だと思います。

最後に、北海道の化石と博物館に興味を持っていたき、「ほっかいどう学」にシリーズを組んでくださった北海道開発協会に感謝します。本誌はオンラインで誰もがどこからでも読むことができますので、北海道だけでなく、日本や世界の博物館文化がさらに育つことにつながることを願っています。ぜひ、お近くの博物館に遊びに行ってみて、良いところを見つけて、友人・知人にオススメいただけたらと思います。クチコミの力は非常に強いものだと思います。この機会に博物館のあるくらしを通して、博物館文化を育てる仲間になっていただけたら、喜びもヒトシオです。

◆さらに興味のある方へ◆

サッポロクジラの研究や企画展に関わった北海道大学総合博物館のボランティアのみなさんの活動と想いについては、読み物として田中（2026a）でご紹介しています。沼田町化石館や足寄動物化石博物館など北海道にある古生物系ミュージアムの設立に関わった方々の想いについては論文として、田中（2026b）で紹介し学芸員と博物館の関わりについて考察しています。どちらもウェブ上で無料で読むことができます。

引用文献

- Tanaka, Y., Kimura, T., Shinmura, T., Ohira, H. and Furusawa, H., 2025: A new member of a large and archaic balaenid from the late Miocene of Sapporo, Hokkaido, Japan partly fills a gap of right whale evolution. *Palaeontologia Electronica*. vol, 28(2):a37, p. 1–58.
- 田中嘉寛, 2026a: 企画展「クジラの化石」展を通してえた博物館文化の感覚. 北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース. vol, 72, p. 5.
- 田中嘉寛, 2026b: ミュージアムにかかわる研究者がどのようにミュージアム創設の要素を作り出してきたかー北海道の古生物系ミュージアムにおける脊椎動物化石発見と研究に注目してー. 今金地域研究. vol, 7, p. 1–14.

イタクラマツ―言霊

言霊、つまり言葉に魂があるという考え方は古来から日本にもあります。万葉集や平安時代の和歌には呪術



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モンレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。北海道大学大学院農学院農学専攻博士後期課程修了。全国通訳案内士。

昔のアイヌの人々は、神に願いや抗議を伝えるためイタクラマツを巧みに使いこなしていたといわれます。アイヌの子ど

もたちは、大人が物語を語るのを自然に聞きおぼえて、その奥ゆきや幅の広さ、節回し、起承転結などを学び、まねして人に聞かせたりしていたそうです。その過程で言語能力が磨かれ、今風にいうとプレゼンテーションの力が育まれたというわけです。子どもたちは、物語を語るときにしか使われない^{みやび}雅な表現、聴衆が納得したり心を動かす表現や美しい言葉も実践をとおして自然に身につけていきました。

また、身内に災難や不幸があったりすると、人間の不注意もあるかもしれないが、神の守りが不十分だったということで、神様にも強く抗議して責任を問います。こういうところは「長いものには巻かれろ」とか「臭いものにはふた」というふうに、問題があっても曖昧にしようとする日本の発想とは全く異なっています。むしろ、より具体的な表現を好む、狩猟民族が主流の欧米的言語表現との共通点を感じます。日本人も縄文時代は狩猟民族だったはずですが、集団で作業する必要がある稲作が普及し、全体としてのまとまりを優先した結果、個人の主張というものをしなくなってきたのかもしれない。

アイヌ式裁判のチャランケでも弁護人がどれだけ言葉を駆使して説得力のある弁論ができるか、が勝敗を決める重要な要因でした。

テレビもゲームもない時代、ユーカラ（英雄の物語）は人々にとって大切な娯楽であり、明かりといえど^い囲炉裏の炎だけの暗がり、大人たちと一緒に、心躍る話に耳を傾けながら神々や英雄の活躍を想像するのは、子どもたちにとって楽しい時間であったに違いありません。

藤村先生のところでユーカラの勉強をさせていただいていたとき、テキストのなかに「部屋に飾られている刀の金具がキラキラと光り」という表現がありました。何故キラキラと光るのかについて、先生が囲炉裏の炎の揺らめきが反射して光るのだとご説明くださったことがあります。かつてその物語を聞いていた人々が、ユーカラで語られる刀の^{きら}煌めきをイメージしながら楽しんでいた豊かな時間は、スイッチひとつで明かりがつく私たちの生活では味わうことができない経験だと思われます。プレゼンテーション能力についても、日本はまだまだ世界に後れをとっています。物語を聞くことにより、子どものころから言語能力に磨きをかけるといふアイヌ方式は、参考とすべきところが大きいのではないのでしょうか。

.....

*本稿は、元北日本文化研究所代表であった藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施してきたアイヌ文化勉強会の内容を、筆者が取りまとめたものを、藤村先生に長年師事されていた花輪陽平氏に校閲いただいたものです。

藤村 久和 氏（1940-2025）元北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療（整体ほか）等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践してきた。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『アイヌのごはん』（監修、デーリマン社、2019年）、『平成20～令和6年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1～16』（北海道教育委員会、2008～2025年）等。

地元がどんどん広がっていく

名塚 ちひろ (なづか ちひろ) さん 一般社団法人ドット道東理事/クスろ副代表

1986年釧路市生まれ。公立はこだて未来大学大学院修士課程修了。2011年富士通株式会社入社。デザイナーとして社会インフラシステムのデザインや新規ビジネスのプロモーションに携わる。2014年市民団体「クスろ」を設立。2016年Uターン。2019年一般社団法人ドット道東を設立。

北海道に移住（U・I・Jターン）して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域力創造アドバイザー（総務省）のかとうけいこさん。41回目となる今回は、釧路市に生まれ育ち、函館で学び東京で仕事をした後Uターン。まちを「再編集」し続けている名塚ちひろさんにお話を伺いました。

皆と違うまちに住むことが進路選択の一つだったとか

高校3年の8月、現地にも行った父から大学案内をもらいました。公立はこだて未来大学、「デザインが学べるなら」と進学を決めたんです。大学での学びも最高でしたが、まちも良かったんです。釧路とはかな

り文化面が違っていました。文化財の建物をリノベーションした個人商店もありました。開港や戊辰戦争^{ぼしん}について語れる人が多くて、同じ北海道でこんなに違うのか…。夏でも涼しい釧路で育った身には、函館の30度も新鮮な衝撃でした。

大学院修了後は富士通に就職しました。公共システムの画面設計、官公庁や高速道路の監視システム、展示会の映像からWebサイトまで、大学で学んだことをすべて活かせるやりがいのある仕事でしたね。

入社3年目の28歳のとき、高校時代の友人と市民団体「クスろ」を立ち上げました。釧路とまちを「クスろとさせたい」をかけ合わせた名前のとおり、ユーモアで地元を発信する団体でした。月1回の東京～釧路往

復を2年続けるうち、手触り感の違いを痛感したのです。自分がやったことの成果がダイレクトに見えることにやりがいを感じました。東京から地方に移りたくなったんですね。どのまちも魅力はあるのだろうけど、最初に浮かんだのが地元の釧路でした。一緒にやれる人も応援してくれる土壤もあったので30歳で釧路に戻ってきました。

まちを超えた仲間と、道東の輪郭を作ったそうですね

Uターンから2年、フリーランスとして動くなかで壁を感じていました。企画力が足りない。見積もりの相談をする人もいない…。一人でできることに限界を感じていたとき、北見や十勝で同じようにWebメディアを運営している若者たちの存在を知りました。会ってみたら課題観も目標も同じだったんですよ。2018年に「道東誘致大作戦」というイベントを共同開催すると、予想を超える反響でした。得意分野が全然違う人たちが集まったら、私が想像できなかった方向に大きくなり、このメンバーで2019年に一般社団法人ドット道東を設立しました。

現在のドット道東は、デザイン・ディレクション・写真撮影・ワークショップのファシリテーションまで一機通過(ワンストップ)で狙える組織です。また、インターシップのプログラム設計・学生の集客・リクルートサイトの制作まで、幅広く採用支援を行っています。

住んでいるからこそ、住民が何を求めているかの解像度が高いので、行政・民間企業・住民それぞれの課題に共感しながら、目的に沿った落としどころを提案できるようになりました。

今のドット道東について教えてください

設立から7年。創設メンバーが30代前半から40代に差し掛かるなか、焦点は「次の世代」へと移りつつあります。DOTO-NETというコミュニティは800人を超えそのなかで、東京に「東京道東同好会」という会社まで生まれました。道東出身者や道東に関わりたいた若者が自律的に集まり、東京でのイベント集客も担ってくれています。「こんなに道東に関わりたいた人がい

るんだな」と驚いています。

2025年に改定した新ビジョンの言葉は、「道東に、意志と価値が循環する土壤を作る」です。今秋には道東のアンオフィシャルガイドブック『.doto』の増補改訂版が刊行予定で動いています。2020年に発刊した際には初版は5,000部が1か月で完売、増刷を経て1万部を発行しました。前回同様50人以上で制作し、10月の「DOTO FUN」というイベントで先行発売の予定です。「住んでいる人に道東の良さを知ってもらおう本」というコンセプトは変わりません。よりディープな道東をお届けできそうです。

名塚さんにとっての釧路、道東は変わりましたか？

数年前は釧路を「結婚するには最適だけど、いまいち決め手に欠ける^{おきななしみ}幼馴染」と表現していました。「多分いい人だし、きっと幸せになれるけど、^{あか}垢抜けないし…だけど見捨てられない」という、愛憎入り交じった関係でしたね。

今はその感覚が少し変化し、パートナーのような存在です。そういうところもあるよねと認められるようになりました。ほかに素敵でいけてるまちがあっても、「私は釧路が好きだから」と割り切れるようになりました。

移住してきた人たちが「釧路っていいね」と言ってくれ、なかの人の自己肯定感が上がった実感があります。素直に「自分のまちはいい」と言える人を増やしていきたいです。

釧路、十勝、根室、オホーツク、道東全域に友人や仕事仲間が広がった今、地元がどんどん広がっている気がします。(2026年6月取材)

インタビュー後記

「笑えるくらい涼しい」というコピーが釧路市民の誇りになり、道東のガイドブック『.doto』は初版5,000部が1か月で完売した。かつて「釧路が嫌いだった」と言っていた名塚さんですが、次の目標は何ですかと問うと、次の世代に「挑戦と応援が循環する」土壤を作ることかなと応えてくれました。自分たちも地域の人に良くしてもらったからねと語る姿に、頼もしさとしなやかさを感じました。

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表

町の余白を魅力に変える ～それが「職人型町おこし」



吉田 章彦 (よしだ あきひこ)

1986年生まれ。愛知県から移住。和太鼓・尺八のプロ演奏家として活動した後、長野県立上松技術専門校で家具製作を学び、独立。愛知県で家具工房を運営する。2024年3月に上砂川町へ移住し、地域おこし協力隊に就任。2026年4月に「木と革のnanairo」を設立。

【北海道移住を決めた理由】

愛知県で家具工房を営む一方、「いつか生涯を過ごす場所を選ぶなら、北海道にしたい」という思いを抱いていました。その後、妻の仕事が一区切りを迎えたことをきっかけに、広大な自然のなかでものづくりをしながら暮らすという長年の夢を実現するため、愛犬とともに北海道への移住と工房の移転を決意しました。

移住を考えるなかで、単に製作拠点を北海道へ移すのではなく、「ものづくりを通して、地域に新しい魅力を生み出せる場所」を探していました。そこで出会ったのが、地域おこし協力隊という制度です。職人としての技術や発想を活かしながら、行政や地域の皆さんとともにまちづくりに取り組めることに魅力を感じました。さらに、自ら企画・提案しながら活動できる、自由度の高いフリーミッション型を採用していた上砂川町であれば、自分が思い描くものづくりを地域とともに実現できると考え、この町で活動していくことを決意しました。

【職人型町おこしという考え方】

地域おこし協力隊として活動するなかで、私が気づいたことがあります。それは、職人が地方へ移住することで、その地域に新しい魅力が生まれるということです。職人がいれば、ものづくりが生まれる。ものづくりが体験を生み、体験が教育へと広がる。そして人が集まり、やがて町の魅力になっていく。だからこそ、もともと木工や革製品づくりが盛んな地域ではなく、これから新しいものを生み出せる「余白」のある場所で、新しい魅力をつくることに挑戦したいと思いました。

上砂川町には、まだ「ものづくりの町」というイメージはありません。だからこそ、自分たちの技術や発想を活かし、新しい商品や体験を一つずつ生み出していけるのではないかと考えました。私は、この考え方を「職人型町おこし」と呼んでいます。

【職人型町おこしの実践例】

この考え方を実践するため、私はこれまで「職人からできる町おこし」をテーマに活動してきました。その中でも特に力を入れてきたのが、体験事業・教育・拠点づくりの三本柱です。

体験事業

木工やレザークラフトを通して、これまで延べ1,200名以上の方に、ものづくりの楽しさを伝えてきました。毎月開催している「手仕事の会」をはじめ、町内外でクラフト体験を実施し、ものづくりを身近に感じてもらう機会づくりに取り組んでいます。



木工体験

教育分野

令和8年度は、教育分野での活動にも力を入れています。小学校の総合的な学習では、6年生とともに、在校生へ贈る家具の企画・設計・製作に取り組んでいます。また、中学校では全校生徒を対象にレザークラフト授業を実施し、創造力や、物を大切にする心を育む活動を続けています。さらに、10月には木育マイスターの認定を受ける予定です。



ワークショップ風景

拠点づくり

協力隊の任期満了後を見据え、多目的工芸センター「趣芸館」の指定管理を目指しています。これまで工房として利用してきた経験を活かし、職人が日々ものづくりを行い、週末には誰もが手仕事を体験できる施設へと育てていきたいと考えています。

このほかにも、地域の記念品やお祝い品として、町の主要事業である「木と革の育つマタニティマークプロジェクト」の企画・製作をはじめ、マラニックの記念品や、ふるさと納税返礼品の開発にも携わっています。商品をつくるだけでなく、人とのつながりや、新しい地域の魅力を育てていくこと。それが、私の考える「職人型町おこし」です。



木と革のマタニティマーク



ふるさと納税返礼品予定の革製品とスツール

【町に根付く、ものづくりの拠点へ】

地域おこし協力隊としての任期は、今年度で満了します。しかし、私たちにとって、上砂川町での活動はここからが新たなスタートです。今後は、革職人である妻とともに「木と革のnanairo」として、この町に腰を据えて活動を続けていきます。

これまで培ってきた地域とのつながりを大切にしながら、体験事業・教育・商品づくりを継続し、趣芸館を、町内外から人が訪れる体験型観光の拠点へと育てていきたいと考えています。



革職人の奥様や愛犬と談笑する吉田さん

【職人が集まり、挑戦が生まれる町へ】

町内では、私たち以外にも、同世代のチーズ職人や菓子職人など、若い担い手が精力的に活動しています。

上砂川町は、これから新しい特色を育てていける可能性を持った町です。そこに、さまざまな技術や発想を持つ職人が集まり、それぞれの仕事を深めるだけでなく、職人同士が交わることで、新しい商品や体験、町の魅力が生まれていく。そんな好循環を、地域の皆さんとともにつくっていききたいと考えています。

町の余白を、魅力に変える。それが「職人型町おこし」。これからも上砂川町で、職人だからこそできる町おこしを、一歩ずつ実践していきます。

官民連携で挑む「十勝式移住定住支援モデル」

ー 広域連携による移住体験ツアーの実証実験から見たもの ー

NPO法人 Qucurcus

近年、地方移住への関心が高まる一方で、移住希望者と地域との間には依然として大きな情報格差が存在しています。移住フェアやインターネット上では得られない「実際の暮らし」の情報を、どのように届けるか。この課題に対し、NPO法人Qucurcusでは、十勝地域の自治体と連携し、広域型の移住体験ツアーを実施しました。本事業は、移住検討者目線に立った官民連携型の広域移住体験ツアーを通じて、移住成立に寄与する要因を明らかにし、「十勝式移住定住支援モデル」の構築につなげることを目的としています。

【複数自治体を一度に巡る「広域連携型ツアー」】

2026年2月27日から3月1日にかけて、「移住検討者向け！あなたの『住みたい』を見つけに行く 十勝移住スペシャルツアー」を実施しました。対象エリアは清水町、鹿追町、芽室町、音更町の4町。主催企画は当法人が担い、各自治体の移住担当職員が現地案内や相談対応を行いました。参加者は東京都および神奈川県から3名。少人数でしたが、その分、一人ひとりの希望や不安に丁寧に向き合うことができました。

本ツアーの特徴は、「複数自治体を比較しながら体験できる」点にあります。移住検討者にとって、移住先を一地域だけで判断することは難しく、気候、生活環境、商業施設、住宅事情、交通、地域コミュニティなど、比較して初めて見えてくる 경우가多くあります。

一方、小規模自治体にとっては、単独で移住体験ツアーを企画・運営するには人的・財政的負担が大きいという現実があります。そこで、広域連携によって互いの資源を持ち寄り、効率的かつ実践的な移住支援を目指しました。

【事前オンラインセミナーが生んだ“深い対話”】

今回は、ツアー実施前に4町合同のオンラインセミナーも開催しました。過去の実施で参加者から好評だったことを踏まえ、ツアー参加者以外にも対象を広

げたところ、12名の申込があり、当日は13名が参加しました。オンラインセミナーでは、各自治体担当者が地域概要や生活環境を説明し、参加者は基礎情報を得たうえで現地を訪れることとなりました。

その結果、現地では「地域の説明」を繰り返す必要が減り、住宅事情や仕事、冬の暮らし、人間関係など、より具体的で踏み込んだ相談に時間を割くことができました。単なる情報提供ではなく、「自分がここで暮らせるか」を参加者自身が具体的に想像できる状態をつくれたことは、大きな成果だったと感じています。



4町合同のオンラインセミナー

【“観光”ではなく、“暮らし”を見る】

ツアーでは、スーパーやドラッグストア、公営住宅、図書館、体育館など、実際の生活に直結する場所を中心に案内しました。参加者からは、「複数の町を比較しながら見られたのが良かった」「生活のイメージが具体化した」という声が寄せられました。特に印象的だったのは、「住宅だけでなく、その周辺環境や街並みも見られると参考になる」という意見でした。

移住検討者が本当に知りたいのは、物件情報だけではありません。朝起きてから夜眠るまで、どんな風景の中で暮らすのか。買い物は不便ではないか。雪道はどうか。地域の空気感は自分に合うのか。そうした“暮らしの温度”こそが、移住判断に大きく影響します。また、「地元食材の質の高さ」など、十勝ならではの食の魅力を評価する声もあった一方で、「車が必須」「商業施設の選択肢が少ない」といった現実的な課題も率

直に共有されました。移住支援において重要なのは、地域の魅力だけを伝えることではありません。不便さも含めて誠実に伝えることが、結果として移住後のミスマッチ防止につながると実感しています。



町営住宅の見学

【冬開催だからこそ見えた“リアル”】

今回のツアーは、当初予定していた秋開催から冬開催へ変更して実施をしました。結果として、これは大きな意味を持ちました。参加者は、十勝の寒さや雪道、暖房環境などを実際に体感し、「冬の暮らし」を現実的に捉えることができました。北海道移住に憧れを持つ人は多く、しかし、冬の厳しさを知らないまま移住すると、理想と現実のギャップに苦しむケースも少なくありません。だからこそ、あえて冬を見てもらう。これは移住希望者を減らすためではなく、「移住後も幸せに暮らせる人」を増やすための取り組みでもあります。



ランチ会場のCafe Kringel

【少人数でも“移住確度”は高い】

今回の参加者は3名でした。数字だけを見れば、決して多くはありません。しかし、過去2回のツアーでは、参加者の中から実際に十勝へ移住した人もいます。

移住支援においては、単純な参加人数だけでは図れない価値があります。重要なのは、「どれだけ移住意欲の高い層に届いているか」です。自治体担当者からも、「移住確度の高い参加者と直接接点を持てた」「移住フェアでは出会えない層にアプローチできた」といった評価が寄せられました。広域連携によって、自治体同士が互いの強みを再認識できた点も、大きな副次的効果でした。



4町の先輩移住者を招いて開催した“移住者座談会”

【「十勝式移住定住支援モデル」の可能性】

本活動を通じて、「広域連携」「リアルな生活情報の提供」「冬季体験」「高確度層へのアプローチ」が、移住成立に寄与する重要な要素であることが見えてきました。移住は、人生に関わる大きな決断です。だからこそ、表面的な魅力発信だけではなく、「ここで暮らす未来」を具体的に想像できる支援が求められています。今後は、都市部での情報発信強化や北海道関連施設との連携を進めながら、より多くの移住検討者との接点を創出していきたいと考えています。また、本モデルは十勝地域だけに限らず、人口減少や担い手不足に直面する他地域にも応用可能な取り組みであるといえるでしょう。地域の魅力を競い合うのではなく、地域同士が連携しながら移住希望者と向き合う。その積み重ねが、持続可能な地域づくりにつながっていくのではないかと考えています。



ククルクス
NPO法人 Qucurcus
ホームページ
<https://qucurcus.or.jp/>



『人が元気になる』 ソーシャルファームを目指して

亀海 聡さん (かめうみ さとし)
ピリカ株式会社 代表取締役

農山漁村における地域の活性化や、個性的で魅力ある地域づくりの優れた活動を紹介するシリーズ。

今回は「わが村は美しくー北海道」運動第10回コンクールでNPO特別賞を受賞した「ピリカ株式会社」の亀海さんにお話を伺いました。

《障がい者と健常者が共に》

北海道の中央に位置し旭川市に隣接した比布町は人口3,400人ほどの農業の盛んな町です。その比布町で「障がい者と健常者が共に働けるソーシャルファームをつくろう」と活動している団体がピリカ株式会社です。そこでは、自然栽培の野菜や加工品の販売、比布町で唯一のパン屋さんを経営、「ピップエレキバン」のCMで全国的に有名な比布駅で地域の特産物の販売や地場食材を使った食事の提供をしています。

亀海さんは、以前、京都の病院で精神保健福祉士として従事していたときに障がい者の就労支援をしていました。そのときに働く障がい者が目を輝かせて成長する様子を見て、自信をつけることは大切なことだと思い、実家がある旭川近郊で農地を探しはじめます。農業も販売も未経験の亀海さんは、近所の農家に栽培を教えてもらい農業を勉強、加工や販売は行政から卸業者を紹介してもらい販路や経営を学び、2011年「ピピファーム」を開業し、トマトジュース「ピリカノメグミ」を販売。今では加工商品も増え、自然栽培した野菜は大手スーパーでも販売しています。



ピリカオリジナル商品と焼きたてパンのほか、地域の特産品も販売している(ピピマルシェ店内)



比布町での農業は5カ月間雪に覆われ作業ができません。亀海さんは、1年通して仕事ができないかと模索し、当時比布町には無かったパン屋さんを思い付きます。1年かけてパン職人にアドバイスや技術を教わりながら、2014年「ピピマルシェ」を開店しました。開店当初からメディアなどでも取り上げられ比布町民はもとより、近隣の地域からもお客さんが訪れるパン屋さんになっています。店舗の2階では、「映画鑑賞・料理教室・etc」など地域の方々の交流スペースになっています。



ピピマルシェのパンは店舗販売のほか、ホテルにも届けている

2016年には、無人駅だった比布駅の建替え時に町からの要請で「ピピカフェ」をオープンしました。駅には観光客のみならず、インバウンド客や鉄道ファン、故樹木希林さんも訪れたそうです。

比布町は「いちごのまち」としても有名ですが、後継者不足などの理由でいちご農家が減っています。亀海さんは町からいちご栽培をやってもらえないかと言われ、2026年8月にいちごの苗を植えて、2027年6月開園予定のいちご狩りに向けて、これからも比布町でソーシャルファームを目指して活動していきます。

当協会ホームページ、「わが村は美しくー北海道」運動第1～9回受賞団体の活動概要をまとめた冊子『生産空間の活性化に資する地域事例集』をご覧ください。





羽ばたけ! 最北の空へ

入場
無料

39TH HOKKAIDO SKY SPORTS FAIR

第39回 北海道
スカイスポーツフェア **in 当麻**

同時開催 当麻スカイスポーツフェスタ

9.13日

開場 9:30 閉場 15:00

※熱気球は7:00より、ヘリコプターは7:30より体験搭乗。

会場 **当麻スカイパーク**

当麻町伊香牛1区石狩川河川敷

主なプログラム

体験搭乗・操縦

- 熱気球係留フライト(要予約)
- ヘリコプター体験搭乗(有料)
- パラグライダーふわり体験
- ラジコン操縦
- スポーツカイト操作

スカイスポーツ教室

- 紙飛行機
- 竹とんぼ
- 風つくり

模擬競技大会

- 紙飛行機競技会
- 竹とんぼ競技会
- 風あげ競技会

デモフライト

- モーターパラグライダー
- マイクロライトプレーン
- ラジコン
- 水上飛行機
- モーターグライダー
- スポーツカイト
- スカイダイビング

地上展示

- モーターグライダー
- グライダー
- モーターパラグライダー
- 水上飛行機
- マイクロライトプレーン
- 熱気球(バルーン)
- スポーツカイト
- 模型飛行機(ラジコン)
- 軽飛行機

アトラクション

- 郷土芸能(当麻子供囃龍太鼓)
- お楽しみ抽選会(景品)
- グルメコーナー



でんすけくん



お問い合わせ先

(公社)
北海道スカイスポーツ協会

〒060-0061 札幌市中央区南1条西4丁目16-2 道銀ビル別館7階

TEL 011-232-4347 FAX 011-218-5883

ホームページ <http://hospa.jp/>

【主催】(公社) 北海道スカイスポーツ協会

【協力】(一社) 当麻グライダークラブ(当麻航空協会・旭川航空協会)

【後援】国土交通省北海道開発局/北海道/当麻町/旭川市/(一財)日本航空協会

(一財)北海道開発協会/(一財)北海道河川財団/(一財)石狩川振興財団

(一社)北海道開発技術センター/(一財)北海道道路管理技術センター

(一社)寒地港湾空港技術研究センター/(公社)北海道観光機構

【協賛】(株)ドーコン/(株)北海道銀行

※当日の天候状況などにより予定を変更する場合がありますのでご了承ください。※ゴミのお持ち帰りにご協力ください。

お知らせ

9月13日(日)

第39回 北海道スカイスポーツフェアin当麻

※詳細は43ページをご覧ください。

研究所だより

昨年の秋に眼科に行ったついでに検眼して、その処方箋でメガネをつくったところ、どうにもモノが見えにくくなりました。そんなわけで、半年ほど経って、難民支援でも有名な某メガネ店に行き、改めて測定してもらいました。結果、レンズが合っていないとなり、短期間で二回目となる出費は痛かったのですが、見え方は格段に向上して、世界が明るくなりました。

メガネを替えると、世界も違って見えてきます。

話は変わりますが、現代は激動の時代でもあり、昨日の延長線上に今日があるとは言いきれません。身近な例で言えば、近年の全国各地での豪雨や高温は、昔から続く気象の傾向の中でたまたま突出した例が生じたというよりも、温暖化の中で過去とは全く別の状況に置き換わってしまったように素人目には思えます。

地域にしても、人口減少が進む中で、昨日の延長線上だけを考えていけば、茹でカエル理論を辿って、気が付いたときには町に誰もいなくなつたとか、いつの間にかとんでもないことになってしまいます。どこかの時点で、メガネ(考え方や発想)を変えて、同じものに対して違った見方をしていくことが求められると言えるのではないのでしょうか。

当研究所の調査研究がそうした新たなメガネになればという思いで、日々の仕事を進めております。(目黒)

国営滝野すずらん丘陵公園

9月1日(火)～30日(水)

顔に見える葉っぱを探せ!

顔に見える葉っぱを探しに行きましょう。見つけた葉っぱを写真に撮って見せてくれた方に景品をプレゼント!落ち葉はひろって持ってきてくれてOK!

●参加費 無料(入園料・駐車料金は別途)

●場所 森の交流館

●時間 9:00～17:00

9月12日(土)～11月10日(火)

たきのオートムカラズ2026

秋の滝野で色さがし!あなただけのお気に入りの色を探そう!

●参加費 無料(入園料・駐車料金は別途)

●場所 園内全域

●時間 9:00～17:00

9月20日(日)・21日(月・祝)

たきの秋空文化祭2026

コスモスが咲き誇る秋の滝野で“食”と“音楽”を楽しもう!

●参加費 無料(入園料・駐車料金は別途)

●場所 カントリーハウス周辺

●時間 10:00～16:00

※詳細は当公園ホームページ(URL: <http://www.takinopark.com/>)をご覧ください。滝野公園案内所(011-592-3333)までお問い合わせください。



次号から小磯修二さんの特別記事「北海道開発政策の実相」がスタートします。2026年12月号までの連載を予定しておりますので、読者の皆様におかれましては、どうぞお楽しみに!

●「開発こうほう」へご意見・ご感想をお寄せください。

(一財)北海道開発協会広報研修出版部

〒001-0011

札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル

電話 011(709)5212

e-mail: pr@hkk.or.jp

●「開発こうほう」は、北海道開発協会のホームページでもご覧になれます。

●(一財)北海道開発協会では、賛助会員を募集しています。詳しくは、ホームページをご覧ください。

開発こうほう 第757号 令和8年9月1日発行

発行 (一財)北海道開発協会

印刷 (株)須田製版 不許複製

<https://www.hkk.or.jp/>



【新発寒事業所】

業 務 内 容

- 土木工事全般
- 道路維持管理業務
- TVカメラ調査・管更生
- 除排雪業務
- 排水構造物清掃
- 産廃物収集運搬及び中間処理

 HRM HOLDINGS GROUP

HRM 北海道ロードメンテナンス株式会社

HOKKAIDO ROAD MAINTENANCE

本 社	〒060-0031	札幌市中央区北 1 条東12丁目22番地48	TEL (011) 241-1692	FAX (011) 241-7774
真駒内事業所	〒005-0861	札幌市南区真駒内52番地	TEL (011) 592-6512	FAX (011) 594-2258
発 寒 事 業 所	〒063-0835	札幌市西区発寒15条12丁目 1-25	TEL (011) 665-3259	FAX (011) 665-8447
八 軒 事 業 所	〒063-0849	札幌市西区八軒 9 条西 9 丁目 1-31	TEL (011) 676-9810	FAX (011) 676-9820
北 見 事 業 所	〒099-0878	北見市東相内町110番17	TEL (0157) 36-9811	FAX (0157) 36-9812



h-rm.co.jp/



各種施工管理技術検定試験 販売図書のご案内



2級土木施工管理第一次・第二次検定 問題解説集 2026年版

4,180円 (税込)

一次:過去5年10回分、二次:過去6年6回分の過去問題解説



1級土木施工管理 第二次検定 問題解説集 2026年版

3,850円 (税込)

10年分の過去問題を徹底解説



1級建築施工管理 第二次検定 問題解説集 2026年版

3,850円 (税込)

10年分の過去問題を徹底解説



1級電気工事施工管理 第二次検定 問題解説集 2026年版

3,850円 (税込)

10年分の過去問題を徹底解説

販売窓口 (8:30~17:00 土日祝日を除く)

お問い合わせ先

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目セントラル札幌北ビル

一般財団法人北海道開発協会 広報研修出版部

TEL:011-709-5212 FAX:011-709-5225 <https://www.hkk.or.jp/syuppan/>



【発行元】

施工管理技術検定対策ひとすじ半世紀
一般財団法人 地域開発研究所

TEL 03-3235-3601

FAX 03-3235-3612

